

語り継ぐ赤坂・青山 あの日あの頃

赤坂・青山地区タウンミーティング『まちの歴史伝承分科会』

赤坂・青山の
『まちの記憶』を
遺したい



語り継ぐ赤坂・青山 あの日あの頃

赤坂・青山地区タウンミーティング『まちの歴史伝承分科会』



【イラストレーション】木内 信夫さん 大正12年 東京・赤坂生まれ

昭和15年ごろ(当時17歳)から絵日記を描きはじめ、現在も現役で川柳漫画などを創作活動中です。

<http://kiuchi.jpn.org/wanpaku.htm>

はじめに

皆さん、赤坂・青山が数十年前には東京市の山の手、緑多き赤坂区だったのをご存知ですか？ 山の手大空襲・東京オリンピックバブル経済を契機に都市化が進み、今では都心のオフィス街・繁華街となり、昔を知る人も少なくなりました。

歴史に残らない、街と暮らしの思い出を皆さんに伝え、この街をもっと知りもっと愛し、良さを継承し発展させる糧としていただこうと、港区のボランティアが活動の中心となり、昭和前期にこの地に生きた方々に語り部になっていただいて、この冊子を作りました。

たくさんさんの語り部の多方面に及ぶお話から、共通する話題を取り出し項目を立て、担当を決めてお話をまとめました。語り部の記憶がもうとも鮮明な頃は小学生時代でしたので、お話の多くは当時の小学生

世代の見た、昭和前期の赤坂・青山の暮らしをめぐるものとなりました。

貴重な写真や資料もたくさんお寄せいただき、深く感謝いたします。紙面に限りがあり、載せきれないお話もあったことを、ご了承ください。

また、この冊子は「人々の記憶」をもとにしており、厳密な記録ではないため、詳細な点に置いて歴史的事実と異なる部分もあることをご理解ください。聴き取りの記録や写真・資料は郷土資料として整理・保管・公開するよう現在検討しています。

可愛らしくもゆかいな挿絵とそのコメントは、赤坂に生まれ育った木内信夫さんにお願いました。小学生のお子さまにもきっと興味を持っていただけると幸いですので、読み聞かせなどして頂けたら幸いです。

【目次】

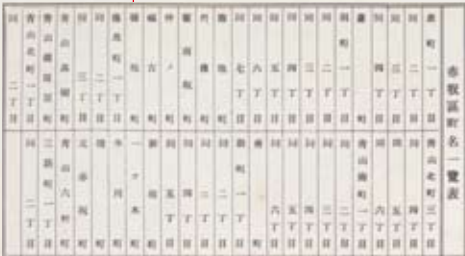
はじめに	1	さまざまな学校行事	1	教育環境	11	ぼっちゃやちやいけない	16
目次	1	修学旅行でお伊勢参り	1	みんな活字に飢えていた	11	なんでもこなす肝つ玉母さん	16
昭和12年頃の赤坂・青山「地図」	3	夏季学園と臨海学園	3	虚弱児のための養護学級	11	優しいモダンな父	16
赤坂・青山の1923年以降の出来事	5	青山地区の学校の思い出	9	先生の思い出	11	衣食住	16
扉「赤坂・青山の沿革」	6	根っこは同じ青南小と青山小	9	学習塾	11	商家とお屋敷の住宅文化	16
赤坂地区の学校の思い出	7	弁当を盗み食いされたっ	9	家庭生活・家族構成	13	子どもたちの着るものは洋服へ	16
赤坂小・氷川小・中之町小、赤坂の学舎	7	教育勅語と最敬礼	9	威厳があつたお父さん	13	子どもたちの着るものには洋服が	16
赤坂の子どもたちと戦前の教育	7	殴る教師慕われる先生	9	親方にしごかれて一本立ち	13	職業や家庭の中にも日本と西洋が	16
ケンカは一对一ガルール	7	水の溜まり場が遊泳場に	9	日常生活の習慣・季節の行事	13	和服を着て改まった正月や祭礼日	16
パン食も次第に浸透	19	花柳界	31	洋風娯楽が花開いた日々	43	カレーライスと海老フライが日常の食卓に	16
都市生活を確立した赤坂・青山	19	「花柳界」ってどんな世界？	31	胸をときめかせた活動写真	43	配給制と竹の子生活	16
子どもの遊び場	19	かつての赤坂・花柳界	31	日本の大衆演劇を楽しむ	43	お屋敷の暮らしぶり	16
人気の遊び場	19	芸者さんは身近で懂れの人	31	西洋音楽と日本音楽の交差点	43	ユア・マイ・サンシャイン	16
子どもの正月	19	赤坂花柳界の日常の風景	31	おめかししての歌舞伎見物	43	おまえは兵隊に向いている	16
さようならガキ大将	19	花柳界と二人三脚で発展した赤坂	31	あめかししての歌舞伎見物	43	空襲からの復興は体力勝負	16
ペー「ママ	19	最高のおもてなしをするために	31	集団疎開	45	赤坂区沼津戦災児学園	16
首相と草野球	19	軍隊と二・二六	34	テストケース	45	取材メモから	16
戦車の轟音	19	軍隊の街、赤坂青山	34	沼津戦時疎開学園の教育環境	45	赤坂・青山地区区民情報「あの日あの頃」	16
女の子はどうしてる	19	二・二六事件 その時、街の人は…	34	遠泳をこなす小学生スイマーたち	45	あとがき・協力者覧	16
女の子はどうしてる	19	兵隊さんへの街の想い	34	肝試しと慰問団と映画	45		16
緑日	23	お祭り	37	視察・取材・面会	45		16
一ツ木通りの緑日	23	花祭り	37	再疎開で一般疎開と合流	45		16
青山善光寺と梅窓院の緑日	23	赤坂の山王さん	37	卒業生が語る青山小の疎開	45		16
寺院や神社の緑日はいつも賑やかに	23	青山熊野神社のお祭り	37	逃げおおせて	45		16
緑日の楽しみ	23	赤坂氷川神社の例大祭	37	赤坂見附の猛火流	45		16
街並み	25	円通寺の秋の御会式	37	赤坂国民学校焼亡「故本間馨さん手記より抜粋」	45		16
江戸時代から現代へ続く街並み	25	西教寺のクリスマス	37	表参道の地獄	45		16
赤坂の街並み	25	赤坂氷川神社の大祓	37	「いのち」を拾って	45		16
青山の街並み	25	豊川稲荷東京別院の豆まき	37	立ち上がり	45		16
坂の街	25	赤坂氷川神社 蘇る祭りの風景	37	情報源	45		16
市内電車大好き	25	外国文化	40	戦時中の限られた情報源	45		16
商店・商店街	28	オペラを楽しめた日々	40	戦後に普及した電話	45		16
一ツ木通りと鈴降横町	28	ダンスやスケートを楽しんだ若者たち	40	戦時下・戦後の暮らし	45		16
艶めく花街・田町通りと中通り	28	日常生活にも外国文化の影が	40	家屋の引き倒しに重宝な男	45		16
溜池の果物屋さん	28	身近なところで外国文化に触れる	40	神宮外苑と学徒出陣	45		16
商人が御用聞き	28	帽子屋さんと外国文化との触れ合い	40	兵隊さんのおかげです	45		16
豊園のお茶屋は寛ぎの場	28	走る自動車は外車ばかり	40		45		16
変わる青山、変わらぬ青山	28		40		45		16



赤坂・青山

昭和12年(1937)年に発行された赤坂区詳細図です。今も変わらず残るところがいくつもある一方、現代の地図からは消え去った場所などをたくさん見つけることができます。

またこの地図上からは、当時の都市整備計画がうかがえます。青山帯に見える、破線で縁取られた大きな道路や、市電の線路の部は、この時点の実際の地図ではなく、当時計画されていた道路整備が完了した状態を表しています。戦争によって工事が大幅に遅れ、戦後に整備が再開されると、外苑西通りはこの地図とは大きく違う形で青山通りと交差することになりました。



語り継ぐ赤坂・青山 あの日あの頃

赤坂・青山の『まちの記憶』を遺したい

《赤坂・青山の沿革》

江戸時代の赤坂・青山は、江戸城の外濠に設けられた赤坂見附から、西に神奈川県まで伸びる江戸街道に沿った、山の手と呼ばれる地域でした。

赤坂の台地の上には、紀州徳川家をはじめとする諸大名の屋敷や、江戸八代将軍徳川吉宗の産土神とされた赤坂氷川神社が、また台地のふちには浄土寺などの寺院が由来しました。台地の低いところには、旗本や御家人の屋敷が、低地にはこれら武家の消費を賄う、町人地が設けられました。現在の赤坂見附交差点から溜池交差点までのあたりにかつてあった溜池は、風光明媚な江戸の名所でした。

青山には、美濃郡上藩青山大膳亮や河内丹南藩高木主水正などの大名屋敷、旗本・御家人屋敷がありました。梅窓院、青山善光寺、長谷寺などの大きな寺や、青山熊野神社、金王八幡宮などの古い神社、そして田畑が広がる、江戸市中と郊外との境目にあたる場所でした。

明治になると、旧紀州徳川家の広大な屋敷跡はいくつかの変遷を経て、赤坂離宮と迎賓館、青山御所などを抱える赤坂御用地となりました。赤坂にあった他の大名屋敷跡は華族の屋敷や軍用地に、旗本・御家人屋敷跡は役人や軍人の住宅に、旧町人地は商工業地になっていったのです。

青山では、旧郡上藩青山邸が青山墓地や陸軍青山射的場に、旧篠山藩青山邸は青山練兵場になりました。明治11年(1878)、赤坂・青山を合わせた赤坂区が東京市15区の西端に誕生します。やがて区内には五つの小学校が開校し、アメリカ公使館(現在のアメリカ大使館が築地から現在地に移転してきます。溜池は埋め立てられ、赤坂の花街や商店街へと姿を変えていきました。

幸いにも、この地域の関東大震災の被害は比較的少なかったようです。震災後、青山には住宅が増え、赤坂には、築地で被災したブラジル大使館が移転してきました。

昭和初期に東京市が35区に拡張したとき、赤坂区は新設の渋谷区に隣接します。カナダ公使館、ノルウェー公使館が、丸ノ内から移転してきました。

戦時中の山の手大空襲によって街が灰燼に帰すまでの赤坂・青山は、波打つ緑の大地の上に空が広がる、自然豊かな美しい街でした。ここには、宮家・華族から、さまざまな職業の住民、軍人、外国人など、多種多様な人々が暮らしていたのです。詳しくは、どうぞ本文でご覧ください。

※青山熊野神社・金王八幡宮 現在には渋谷区に属していますが、安政4年(1857)発行の「東都青山絵図」には含まれていました。

赤坂・青山地区タウンミーティング『まちの歴史伝承分科会』

赤坂・青山の1923年以降の出来事

西暦	元号	赤坂・青山	世 相	市電 乗車賃
1923	大正 12	関東大震災 赤坂区人口 59,508人		7 銭
1924	大正 13	葵館(日活直営の洋画専門映画館)開館 赤坂区人口 60,939人		7 銭
1925	大正 14	溜池一六本木間に市電開通 演技座焼失 赤坂区人口 61,045人	山手線全通 治安維持法交付 普通選挙法成立 ラジオ放送開始	7 銭
1926	大正 15	明治神宮外苑開設		7 銭
1927	昭和 2		上野―浅草に初の地下鉄開通 金融恐慌	7 銭
1928	昭和 3		チャンバラゴッコ大流行 第2回普通選挙実施	7 銭
1929	昭和 4	氷川小が類焼により全焼 ダンスホールのフロリダがオープン 府立一中(現日比谷高校)が永田町に移転	少年倶楽部の発行部数が50万部に 世界恐慌始まる レストランにコーヒー・スープ付の1円定食登場	7 銭
1930	昭和 5	旧勝海舟邸に氷川小新築 赤坂区人口 60,234人 李韓国皇太子邸完成(旧赤坂プリンスホテル)	日本橋の百貨店の食堂にお子様ランチ登場 けん玉大流行 電気洗濯機・電気冷蔵庫発売 昭和恐慌	7 銭
1931	昭和 6		少年倶楽部に「のらくろ二等兵」連載開始 紙芝居「黄金バット」大ヒット チューインガム発売(5枚5銭) 満州事変勃発	7 銭
1932	昭和 7	山王ホテル開業	ゴム縄跳び流行 東京市15区から35区に 五・一五事件	7 銭
1933	昭和 8	カナダ公使館が丸の内より現在地へ移転	東京音頭が熱狂的に流行 ヨーヨー大流行 国際連盟脱退	7 銭
1934	昭和 9	赤坂区沼津臨海学園建設	パーマメントが家庭婦人に普及 忠犬ハチ公の銅像建立	7 銭
1935	昭和 10	赤坂区人口 58,700人	洋服・自転車など月賦販売流行(40～50円程度)	7 銭
1936	昭和 11	二・二六事件	ベルリン五輪にて前畑秀子金メダル獲得 新国会議事堂が竣工(資材は全て国産) アルマイト製弁当箱全盛 女性のマフラー・男子のセーラー服流行	7 銭
1937	昭和 12		日華事変 ラジオ(NHK)の聴取者数300万人を突破	7 銭
1938	昭和 13		国家総動員法公布 乗用車の木炭自動車化奨励	7 銭
1939	昭和 14	ダンスホールのフロリダ閉店	第二次世界大戦勃発 鉄製不急品回収開始(木製ポスト出現) 百貨店の年末贈答品の配達廃止 門松全廃 浅草―渋谷間銀座線全通	7 銭
1940	昭和 15	赤坂区人口 55,704人	紀元二千六百年式典 日独伊三国軍事同盟 全ダンスホール閉鎖	7 銭
1941	昭和 16	高橋は清翁記念公園開園 根津美術館開館	日ソ中立条約 太平洋戦争勃発 防空頭巾・もんぺ・ゲートルの非常時服装急増	7 銭
1942	昭和 17		みそ・醤油・塩が配給制に 東京に初の空襲警報 衣類が点数切符制に(年間で都市100点、地方80点。青広50点、ワイシャツ12点など) 「欲しがりません勝つまでは」が流行	7 銭
1943	昭和 18	学徒出陣壮行会(明治神宮外苑競技場)	すべての列車が国家管理 買出しの一斉取締り強化	10 銭
1944	昭和 19	赤坂区沼津戦時疎開学園開設 赤坂区人口 48,702人	14～25歳の未婚婦人を軍需工場に動員 建築物の強制疎開開始 都内の高級料理店・待合・芸妓屋・バー・酒屋を閉鎖 学童疎開開始	10 銭
1945	昭和 20	山手大空襲(死者552人) 赤坂区沼津戦災児疎開学園開設 赤坂区人口 8,791人(11月)	終戦 街頭に闇市(青空市場)氾濫 戦後初の映画「そよ風」封切り、主題歌「りんごの歌」大流行 手持ちの衣類を食料に換えることから、「タケノコ生活」の語が流行	20 銭
1946	昭和 21	赤坂区人口 12,881人	学校給食開始 食糧事情悪く1都24市への転入禁止 国史授業をスミ塗り教科書で再開	40 銭
1947	昭和 22	赤坂・芝・麻布区を統合し、港区誕生 赤坂中・新星中創立 赤坂・青山地区人口 18,624人	東京で喫茶店復活 コーヒー1杯5円 町内会・隣組組織強制解散 パンの切符配給制実施 電球1世帯に1個配給	2 円
1948	昭和 23	赤坂・青山地区人口 23,166人 新星中が青山中に改称	郵便料金の4倍値上げをはじめ、鉄道・ラジオ・新聞の倍々式値上げ 続く/公道価と闇値の差がだいぶ縮まった	6 円
1949	昭和 24	赤坂・青山地区人口 27,995人	新入学児童へ学用品の配給を開始 ピアホール復活 東京都 失業対策事業の日常を240円と決定(ニコヨン)	8 円

御用地のお膝元で育ったわんぱくたち

平成のはじめ頃まで三つの小学校を擁していた赤坂の町。戦前には、今よりずっと数多くの子どもたちがここで生活していました。当時子ども時代を送った人たちには、伊勢神宮への修学旅行や沼津の臨海学園など、赤坂ならではのさまざまな思い出があるようです。

赤坂小・氷川小・中之町小、赤坂の学舎

赤坂は、明治初期に全国で最も早く小学校ができた地域の一つです。現在は新たな赤坂小ひとつですが、かつてこの町には三つの小学校がありました。昭和初期には、そのどれもが千人を超す生徒が通う、とても大きな学校だったのです。役人、軍人から、サラリーマン、商人、職人、芸者さんの子どもなど、多様な子どもたちが学んでいました。

赤坂の子どもたちと戦前の教育

戦前には、大日本帝国憲法のもと教育勅語を理念とした教育が行われていました。赤坂御用地はもちろん、皇居とも近い赤坂の小学校では皇室が身近な存在でした。

かつての赤坂小は、赤坂御用地のすぐ近くにありました。敷地内の邸宅から、三笠宮がたびたび学校を訪問したとか。三小学校の

子どもたちはしばしば青山通りや外堀通りの沿道に並ばされ、天皇を始めとした皇族の送迎をしました。東郷平八郎※1の国葬の時は、青山通りを肅々と進む葬列の見送りをしたそうです。

四大節の祭日※2は登校日でした。学校では必ず日の丸の旗を揚げ、校長先生による、まるで神主さんの祝詞のように難しい教育勅語の奉読と、各祭日の唱歌斉唱が行われました。「教育勅語を聞いていても、何言ってるか全然わからなかった。だから、『朕思わず屁をたれて汝臣民臭かろう、これも国家のためなれば少しの我慢を……』なんてふざけたら、怒られたねえ、不敬罪になっちゃうからね」という、当時の思い出話もあります。帰りにももらえる、校章をかたどった打ち菓子を楽しみでした。



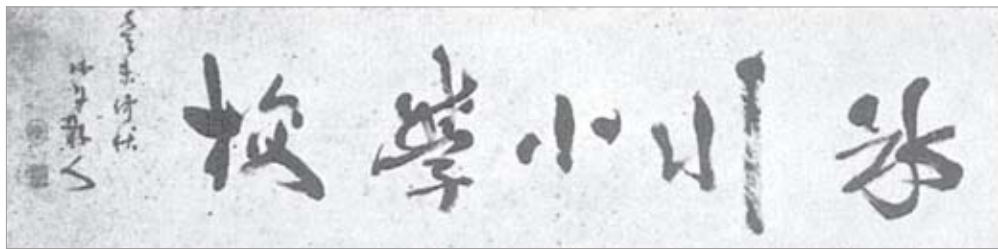
ケンカは「対一」がルール

ケンカが起きると、他の子どもたちが周りを土俵のように囲み、手出しすることなく勝負を見守りました。取っ組み合いで片方が組み敷かれたら、「相場は決まったね」などと周りが言って決着です。「ケンカは基本的に一対一でやるもの。一度だけ級長選挙の買収をめぐつて、三人で大勢相手にケンカしたことがあったけど、後はさっぱりしていたね」と語るのは、わんぱく小僧だったというKさん。多くの子どもたちがケンカをしました。が、そこには潔く、まさに「さっぱり」とした気風があったようです。

さまざまな学校行事

各小学校の運動会には、赤坂区内5校対抗リレーの種目があり、他校から選手がやってきて競いました。そんなこともあって、学

- ※1 東郷平八郎 弘化4年(1848)～昭和9年(1934)。元帥海軍大将。日露戦争でのバルチック艦隊撃破で有名です。
- ※2 四大節の祭日 昭和2年(1927)に制定された四祭日の総称。元旦の四方拝(1月1日)・現在建国記念の日となった紀元節(2月11日)・昭和天皇誕生日の天長節(4月29日)・明治天皇誕生日の明治節(11月3日)からなります。
- ※3 肉弾三勇士 爆弾三勇士とも。昭和7年(1932)の上海事変において、三人の一等兵が点火した破壊筒を持ったまま敵陣に突入り自爆したことが、美談として当時大きく報じられました。



勝 海舟 書／赤坂区史

修学旅行で
お伊勢参り

昭和9年(1934)から、赤坂小では鎌

校間に対抗心が芽生えたようです。

遠足の日には井の頭公園や横浜のほか、よく高尾山へ行きました。当時は省線と呼ばれた現在のJR四ツ谷駅まで学校から歩いて、中央線に乗ります。高尾山の近くにある大正天皇の多摩御陵に先にお参りしてから、山を登りました。当時からケーブルカーがあ

りました。が、体が弱い子以外は使わなかったそうです。6年生になると、鎌倉への遠足行事がありました。

学芸会では、男子が通学服の腰に手作りの剣を下げて「肉弾三勇士」※3の劇を演じました。舞台の袖で机のふたを開け閉めして、「パンパン」と鳴る銃の効果音を出しました。

夏季学園と臨海学園

倉への遠足の代わりに、国家神道の最高神・天照大神を祀る伊勢神宮への修学旅行が始まりました。小学校の修学旅行は、昭和初期より前には無かった試みです。

出発の日、6年生たちは朝早くに明治神宮に集合した後、原宿駅の代々木寄りにある、天皇のお召し列車専用の駅から出発しました。ここから丸一日かけて京都へ行き、旅館に宿泊。翌日に伊勢へ行きました。この修学旅行は、いよいよ第二次世界大戦が始まる前までの3年間にわたって行われました。

戦前は風光明媚な保養地として知られていた三子玉川の兵庫島に、赤坂区の小学生のための多摩川夏季保健所が設けられました。ここでは昭和2年(1927)から、健康増進を目的として水泳、訓話、体操、見学、学芸会などを行う夏季学園が開設され、区内小学校の希望者700名が参加しました。子どもたちは、当時生前のハチ公がいたという渋谷駅から玉電※4に乗り、この夏季学園へ通いました。

昭和11年(1936)には、静岡県沼津市の我入道に赤坂区沼津臨海学園※5が開かれました。8年後には、ここが学童疎開先のひとつとなったのです。

学校紹介

赤坂尋常小学校は、明治3年、赤坂の町役人たちが開いた、子どもたちに読書算を無償で教える習学所がはじまりです。その後、明治6年に公立として、幕田井上左太夫邸跡、大岡越前守邸跡に開校しました。

中之町尋常小学校は、明治27年、赤坂小学校から独立して開校しました。明治44年に現赤坂小学校の場所に移転後も校名はそのままです。[地図B3] 戦時中は乃木国民学校、戦後は檜町小学校と時代の変遷につれて改称しました。

氷川尋常小学校は幕末の寺子屋泰林堂を前身とする私立氷川小学校[地図C2]が明治41年に公立校となったものです。昭和4年に勝海舟邸跡地に移転し、翌年「勝海舟終焉の地」として東京府史蹟に指定されました。

中之町小学校と氷川小学校にはスチーム暖房やプールなどの最新設備が整っていたため、学区外からの越境通学や、視察がありました。その後、児童数の急激な減少により、平成5年に統合し、中之町小学校(戦後は檜町小学校に改称)の場所に新たな赤坂小学校が開校しました。

なお、本文中では、赤坂小、中之町小、氷川小と表記しています。



赤坂尋常小学校 大正7年(1918)に落成した、辰野技師設計の木造校舎。空襲で焼失。／赤坂区史



中之町尋常小学校 昭和8年(1933)落成の鉄筋校舎。／赤坂区史



氷川尋常小学校 昭和6年(1931)落成の鉄筋校舎。／赤坂区史

※4 玉電 玉川線と呼ばれた、現在の東急田園都市線の一部に当たる区間。当時は路面電車でした。

※5 赤坂区沼津臨海学園 この年から、赤坂区児童の臨海学園として毎年7～8月に開校。昭和13年(1938)からは、夏以外の10か月間に虚弱児童の養護施設・沼津養護学園が開かれ、戦局が厳しくなった昭和19年(1944)には、一時的に赤坂区沼津戦時疎開学園となりました。

怒られても、ひもじくても、へこたれなかつた子どもたち

第二次世界大戦の直前にあたる昭和初期。次第に軍国主義に染まっていく厳しい世相の中で、青山に暮らした子どもたちにも、それぞれ辛いことや悲しいことがありました。それでも彼らは、毎日をたくましく生きていたのです。

根っこは同じ青南小と青山小

青南小〔地図B5左下〕は、明治39年（1906）9月に青山小から分離、独立しました。「われわれ世代の青南小は、担任教師の姓別にM島、K林、T橋とクラスが分かれていた。僕らはI上教室。この先生は、進学を目指す生徒の補習授業に情熱を捧げていました。放課後の補習は禁止されていたから『親には道草食って、帰るのが遅れたと言いなさい』と、言い訳まで考えてくれてね」と異口同音に語るののは、昭和13年（1938）の青南小卒業生たち。毎月一回は集まるという仲良しグループの面々には、今も小学生時代の鮮烈な思い出が残っています。

この青南小より先発となる青山小〔地図B5右上〕は、昭和2年（1927）に、東京の小学校のモデル校として鉄筋コンクリートの校舎となりました。男子の柔道、女子の裁縫、他にも体操の科目に専門の教師を招くなど、教育のあり方がユニークだったため、他校から見学者が来ていたといえます。大正14年

横向き、後ろ向きのいずれかで、役柄が分かる仕組みになっていた遊びでした。

そうこうするうちに、朝礼台の上に校長先生が立ち、講話が始まります。ある少年が友人たちの出欠を目線で数えると、仲良しのAが見当たりません。その時、「こらァ」という声が聞こえて、その方向に担任の先生がすっ飛んで行きました。

それまで学校内で何度か起きていた弁当の盗み食い事件は、この日を境にぶつりと止まりました。先生から犯人探しを指図されていたAが、朝礼の時教室に潜んでいて、この時ついに犯人を見つけたのです。朝食抜きの子が空腹のあまり引き起こしていた、哀れな事件でありました。

教育勅語と最敬礼

戦前の校長先生は、鼻の下に立派なひげを生やし、まるで修身（道徳）の本から抜け出してきたように厳めしくふるまっていました。校長が白い手袋で教育勅語の巻紙を捧げ持つと、教職員、生徒ともども最敬礼。校長はこの上なく慎重に巻紙を広げ、おごそかな調子で読み上げるといふ、今となつては滑稽にも映るこんな儀式が、戦前当時の青山小でも、他の学校と同じように大真面目に行われていたのです。

（1925）に青山で生まれ育ち、嫁入り先も青山だったMさんによると、「私が入学した時の青山小の1年生は、男女それぞれ2クラス、計4クラス。1教室が30〜50人程度で、クラス替えは数年に1度。袴をはいた女の先生が教鞭をとっていました」とのことです。

またこの青山小には、当時は都内でも有数とされた立派なプールがありました。壁にしつらえたいくつものライオン口から、水が噴き出していたとか。プールの中は1段、2段、3段と段階ごとに深くなっていて、低学年は危ないからと泳がせてもらえませんでした。赤いふんどし姿で飛び込む上級生を、羨ましく思ったといえます。

弁当を盗み食いされたつ

青南小の子どもたちが登校して真っ先にすることは、当時はまだ珍しかったスチーム暖房の上に弁当箱を乗せることでした。

そのあと校庭に出て朝礼を待つ間に、「軍

3月10日の陸軍記念日には、昭和天皇が宮城（現在の皇居）から現在代々木公園一帯にあたる代々木練兵場〔※1〕へと向かいます。この日青南小と青山小の子どもたちは、天皇が通る道路沿いの席敷きに正座して、お迎えすることになっていました。小学生の頃のお迎えの時、「もし頭を上げて陛下を見たりしたら目が潰れるぞ」と言いきかされていたにも関わらず、自宅二階の物陰からのぞいて、憲兵に捕まったTさん。「本当か嘘かを確かめたい」心の、勇氣ある行動のつもりでしたが……」と語ります。

殴る教師 慕われる先生

「ポケットに忍ばせたかんしゃく玉が、転んだ拍子に破裂して大騒ぎとなり、教室前の廊下に長いこと立たされたり、女子生徒が遊んでいたドッジボールを蹴飛ばして便所に命中させ、校庭に立たされたり。いたずらの領域は学校に止まらず、青南小の近隣、青山墓地も格好の遊び場所。墓石の後ろに立つ卒塔婆〔※2〕を引っこ抜きスキー板代わり。先生や大人に叱られ、殴られたことが、子ども時代の豊かな思い出につながります」と語るKさん。

当時の日本ではどこでもそうでしたが、軍国主義・国粋主義下の教育は、今と比べてとても厳しいものでした。小学生といえども、スパ

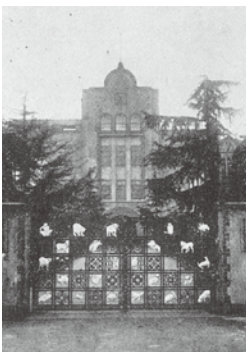
学校紹介

青山尋常小学校

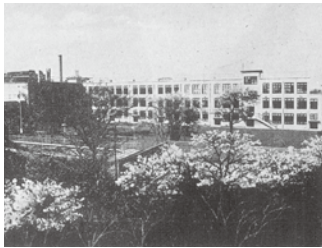
明治8年（1875）11月、職員5名、児童194名をもって青山南町4丁目の教学院敷地内（現在の外苑前郵便局辺り）に創立。明治19年（1886）に現在の地に移り、昭和2年（1927）には他に先駆けて鉄筋コンクリート3階建ての校舎が完成。プール・道場・裁縫室など、施設が極めて充実した恵まれた環境の下、青山の伝統を育みました。

青南尋常小学校

明治39年（1906）、青山小学校から分離し、児童236名をもって創立。創立時は青南尋常小学校と称していました。昭和11年（1936）には、当時としては珍しい太陽灯照射設備やプール等を備えた鉄筋の新校舎が完成。同年、生徒数が1,690人と開校以来最大人数となり、青南の地には子ども達の元気な声が響き渡りました。なお、本文中では、青山小、青南小と表記しています。



青山尋常小学校／赤坂区史



青南尋常小学校／赤坂区史



昭和2年 青山小のプール／青山小提供

ルタ教育に熱心な教師に容赦なく叩きのめされることが、珍しくはなかったのです。

しかし、こうしたひどい体罰を加える教師ばかりかと言えはそうでもなく、囁んで含めるように叱るだけの先生もいました。青南小に通う少女が、入院した母親を見舞つて「お別れの時、おかあさんがほつべたにキスしてくれた」と作文に書いたところ、ある女の先生は「キスという敵国の言葉を使つてはいけませんよ」と注意しながらも、大変ねと慰めてくれたそうです。

水の溜まり場が遊泳場に

「夏に友人宅に出掛けると、水のある所ならたちまちプール代わりに。自家製のふんどしや、素つ裸でも平気で泳ぎましたよ」とは、Iさんの談。

終戦直後の子どもたちの水泳場所は、神宮外苑絵画館前の池、いちよう並木の近くの丸池〔地図A4上〕や、町中のあちこちに残る防火用貯水池など。泥臭く汚れた水浴びでも子どもには天国でしたが、今思えば病気になるかつたのが不思議なくらいでした。そんな中で、第一師団司令部跡〔地図B4右〕の貯水池は、たとえ底に危険な瓦礫が積もつてはいても、直径10センチほどの水道管から新鮮な水があふれ出る、最高のプールでした。



大正9年 女子組輪ダンス披露／青山小提供

※1 代々木練兵場 現在の代々木公園。総面積は92haで、明治43年（1910）、青山練兵場（現明治神宮外苑）の代替地として開設されました。

※2 卒塔婆 墓石の後ろに立てる、上部が塔形となった 供養のための細長い板。

開校100周年記念式典

平成18年（2006）11月18日、青南小では開校100周年記念式典が行われました。ここを卒業した数多くの著名人も顔を出し、それぞれの小学生時代を懐かしく思い出したそうです。

学びの場と先生たちの思い出

子どもたちと、父母の次に身近な大人だった学校の先生たちには、さまざまな関わりがありました。食糧と同じように、当時は本も貴重な物資の一つ。子どもたちは友達と貸し借りをしながら、むさぼるように本を読んだのです。

みんな活字に飢えていた

大人たちは『中央公論』や『婦人公論』を、子どもたちは『大毎小学生新聞』(現在の毎日小学生新聞)や『少年倶楽部』、『少女倶楽部』(戦後に誌名が少年クラブ・少女クラブに変わりました)を読んでいた。

また子どもたちは、本屋から雑誌を定期購読している数少ない裕福な子から本を借りては、みんなで回し読みしました。人気があったのは、『ガリバー旅行記』、『源頼光鬼退治』、『猿飛佐助』などの冒険ものです。本の中の情景を思い浮かべて、わくわくしていました。

当時、本はとても少なく高価なものでしたから、安く本を貸してくれる貸本屋は大繁盛していました。今も有名な『怪人20面相』や、漫画の『のらくろ』『冒険ダン吉』など、貸本屋には楽しみがいっぱいありました。少女雑誌も多く置いてあり、たくさん女の子たちが利用しました。

食を食べました。Sさんが4年から5年になった頃には全校生徒が給食を食べるようになったのですが、こうなった後の給食はボリウムが十分なのに、外米を炊いたご飯がまずかった思い出があるそうです。Sさんが3年生になった時、戦況が厳しくなり、教育の場でも余裕の持てる時代ではなくなつたためか、M沢学級は無くなりました。

先生の思い出

戦時中に少年時代を過ごしたSさん。3年生の時の担任は、外国人のような顔をした、非常にハンサムなA先生でした。

先生は生徒たちに毎日宿題を出していたのに、ある時何も出さなかった日がありました。思えば、それが最後の授業日だったのです。みんなで「明日の宿題は何ですか」と聞いたら、先生に「自分で工夫して、何でもいからやつていらつしやい。」と言われ、下校しました。

すると翌日、A先生がいなのです。隣のクラスの先生が「A先生は兵隊に行きました、もう来ません」と伝えたので、子どもたちは皆びつくりして、泣いてしまいました。昨日は、本当の事を言えば先生も泣いてしまうので、話ができずに帰つたのだそうです。南方戦線での従軍中にマラリアにかかり、復

戦前に講談社から発行された、真田幸村や塙団右衛門の少年講談を、戦後になってから六本木の貸本屋へ借りに行ったというIさん。本が読みたくてたまらなかつたので、保証金を没収されることになつても本を返さずに、友達と回し読みをしました。個人が持つていた本を友達に貸し、その友達がまた別の友達に貸し……という「また貸し」がよく行われたので、しまいには大事な本が無くなつてしまうこともありました。

虚弱児のための養護学級

青山小には、虚弱児童を集めたクラス(養護学級)がありました。虚弱ではなかつたものの体が小さかつたSさんは、「そういうクラスがあるなら入れてもらえ」と親に勧められ、2年生の時ここに入ったそうです。

当時このクラスは、M沢学級と呼ばれていました。2年生と3年生の男子と女子が、一つの教室を使つた二学級に集まつていま

員後に亡くなつたということでしたが、芯のある、大変いい先生でした。

A先生がいなくなつても男性の補充教員が無かつたため、3年生の3学期から、当初は男子生徒だけだったSさんの男組は、女性の教師が率いる男女混合クラスになりました。

この時は、講談師の息子の隣の席になつたのですが、この子がそれは「喋る」のです。おかげで「その二人、何をやってますか」と、先生から年中注意されていました。

四年生で担任となつた男性の先生も一学期で出征していき、また女性の担任になりました。この先生は、生徒へのお仕置きとして「ここへ入つていらつしやい」と、掛図室で反省させました。

五年生の時の担任は、ボンちゃん先生と呼ばれていました。このあだ名の由来は、当時流行つた漫画『只野凡児(ただのぼんじ)』と似ているので、ボンちゃん。それがボンちゃんに変わったものでした。

学習塾

今でいう夜学のようなものでしょうか。赤坂小学校では、夜の空き教室で子どもにそろばんを教えていました。学校の先生が教えてくれる場合もあれば、外部から専門の先生が来て教えてくれることもありました。

た。先生が3年生を教えている間、2年生は自習の時間になります。つまり、一つ上の学年の授業を聞くことができたのです。

M沢学級には、他にもちょっとした特典が二つありました。一つは、午後の授業の前の昼礼に出なくても良いことです。その間代わりに屋上で遊んでもよく、これは学級外にはモグリ、つまり無許可だった秘密でした。屋上にあつた神社には生徒の立ち入りが禁止されましたが、ここへ上ると議事堂はもちろんのこと、汐留あたりから東京湾までが見渡せました。

ある日のこと。校庭で他のクラスの皆が昼礼をしている時に、屋上から「おーい」とぶざけてみせた子どもがいたとか。Sさんは必死で止めましたが、M沢学級の仕業だとすぐ分かり、先生が大恥をかいてしまいました。

もう一つの特典は、当時まだ一般的ではなかつた給食がついていたことです。このクラスの生徒たちはお昼になると、講堂の地下にあつた給食室の隣の、畳敷きの柔道室で給

また、鈴降横町にかつてあつた西教寺「地図B2中央」では、学校の先生が教える学習塾をやっていました。生徒の多くは小学校高学年ぐらいの子たちで、低学年はほとんどいませんでした。ここでは主にそろばんと国語を習いましたが、いわば補習授業みたいなもので、算術(算数)はあまりやりませんでした。

小学校5年生の時、南青山2丁目にあつた個人塾に入つたIさん。近くにほかの塾はなく、青山小の児童3〜4人が、焼け残つた先生の自宅の二階を使つたこの教室に通いました。次第に生徒が増え、一階の広い部屋に移りました。教室は学年制、座席は成績順でした。

6年生の時、Iさんが小学校でたまたま良い答えをすると、先生から「お前は塾に通っているからな」と嫌味を言われました。この塾は、生徒の塾通いを好まないこうした青山小の先生の態度から一度は閉鎖に追い込まれたものの、父母たちの希望が多かつたために、また再開することになりました。

昭和22年(1947)に青山中が開設されて、青山小や他の学校の卒業生がここに入學すると、以前より広い地域から、生徒がこの塾へやつてくるようになりました。優秀な生徒が集まるようになると、近くの子どもたちは辞めていきました。



僕が廊下に立たされているのに、何で妹が泣くんだろうと思った。僕は何度も立つから平気だったが、妹の方は何度も僕が立つから恥ずかしかったそうだ。[イラストのコメント：木内信夫さん]

父の威厳と母の優しさ、暮らしは季節とともに

一家を率いる厳めしい父親と、家事を一手に支える母親。戦前の家族のあり方や暮らしの様子は現代と大きく違っていました。生活に根差した季節の行事はどれも欠かせぬものとして、大切にされていました。

威厳があつたお父さん

昔の父親像には威厳がありました。先生、お巡りさん、そして父親は、子どもたちにとつて特別な存在でした。父親たちは子育てに関心を持つてはいましたが、直接文句を言うより「おれの背中を見て育ていけ」と、子どもたちを感じさせていました。口数は少なくとも怖くはなく、しつかりとして優しかったのです。

様々な職業の父親がいましたが、相手がどんなに社会的地位の高い人であっても、そうでない人でも、上に見たり下に見たりしない自由な風風が、赤坂にはありました。

江戸時代生まれで明治育ちのある父親は、一本筋が通った気質の人でした。

明治後期生まれのある父親は、大正デモクラシーの雰囲気を身につけていました。『赤い鳥』※1の時代に育った人だったためか、ただやかましく怖いだけの父親とは違って、どこか穏やかでした。

また大正生まれのある父親は、大正デカダンスに影響された自由な思想が、その前の

を持たせてもらうのですが、その時は全て親方が面倒をみてくれました。

日常生活の習慣・季節の行事

家庭で日常生活に必要な買い物は御用聞きに頼むほか、近所のお店や市場へ買い物に行きました。食べ物には百匁（375グラム）単位で量り売りで、竹の皮などに包んでくれました。また、時にはデパートへ行くことも。日用品は渋谷の、上質な物は日本橋の百貨店へ買いに行きました。

朝食の前に、必ず仏間の仏様にお水をあげ、お花の水を換えて、お線香をあげてから食事をしました。父親が箸を付ける前には他の家族は決して先に食べず、母親は最後に食事をしました。他にもお風呂の順番など、当時の家族にははつきりとした序列があり、父親が一家の采配を振るいました。跡継ぎとなる長男は大切にされる一方、女の子は外に出されるので、厳しく育てられました。

お盆には、胡瓜や茄子などを蓮の葉に乗せて、仏壇に飾りました。これは、胡瓜が意味する馬に乗って早く帰ってきて、茄子になぞらえた牛に乗って、ゆつくり彼岸に戻ってくださいという、ご先祖様への家族の思いを表現するものだったのです。豆などを炒るのに使う焙烙の上におからを引いて燃やし、玄関に煙が上がってい

明治育ちの人とはひと肌違っていました。自分が厳格に躾られたため、逆に優しくなっていたのです。

子どもは父に書を教わりました。字が上手で、色々な言葉を知っている父との会話の中には、時には難しい格言が出ることもあり、また。母親が父親を大切にして、家長として接していた事が、子どもたちにも影響していたといえます。

親方にしごかれて一本立ち

世襲制が一般的だった昔は、多くの場合長男が家業を継いでいました。家庭内の絶対的存在である父親の要望に、子どもが反抗することはめつたにありません。男の子がいな

ときは養子を迎え、家業を継がせました。一方で、赤坂で十六代続く酒屋さんでは、家に男の子がいても財産を持たせて外に出し、店に勤める真面目な働き者を養子に迎えて、商売を継がせたそうです。

店によつて違いはあるものの、小僧さん達は

るうちに、ご先祖様を家の中にお迎えしました。これは昔からの習慣で、多少の違いはあつても、どの家庭でも行っていた季節の行事でした。

お盆が終わつたらお供えの処分を引き受ける「お迎え屋」がリヤカーを引いてやつてきました。地方では川に流された胡瓜や茄子を拾い、福神漬けにする商売もあつたそうです。

年の暮れの十二月三十日には、家の神棚、台所、各部屋、洗面所、浴室、廊下などに輪飾りを飾り、大掃除を手伝ってくれた使用人には、お餅入りのお汁粉をふるまいました。翌三十二日は厄払いの大祓に出かけ、夜には年越しそばを食べ、除夜の鐘の後、神社にお参りました。

お正月は、家族そろつてお屠蘇とお雑煮でお祝いをします。おせち料理は全部自分の家で調理していました。一月七日にはお正月のお飾りを外して、七草粥を食べました。

ぼっちゃけちゃいけない

関東大震災の後、東京府が各区二か所に日用品を扱う商店を集め、市場を形成するという募集をした結果、東京府市場協会赤坂市場〔地図B2左下〕が開設されました。

市場は当初、肉屋、八百屋、魚屋、お菓子屋、雑貨屋、荒物屋、乾物屋の七軒で始まったの

仕事を覚えるために店に住み込むので、給料を支払わずに働かせることができ、それで商売が成り立つ時代でした。小僧さんたちは、店に雇われると食事と住まいを提供してもらいます。休みはお盆と正月の、藪入りと呼ばれる二日間だけで、盆と暮れには店からお遣いをもらいました。

戦前の仕入れは、ツケを半年ごとに支払う盆暮れ勘定でした。お得意さん達からは月末払いや翌月払いが主なので、月末に集金に行くか、お盆と年末にまとめて集金に回ることが普通でした。昔は、酒屋で一日にお酒を三本売れば二家を養えた時代もあつたそうです。

酒屋ではお酒の他にも、塩などの調味料を扱っていました。赤坂では、料亭や待合に料理を出す仕出し屋さんが、お酒や調味料を納めるお得意さまでした。また料亭は夜に営業するので、ビールやお酒の配達が遅くまである、大変な仕事先でした。

和菓子屋や理髪店など、様々な商店の使用人たちは、親方のもとで修業をして技術を学び、一人前になると暖簾分けといつて支店

ですが、新たにたくさんの応募があり、呉服屋、洋品屋などが加わつて、だんだん規模が大きくなりました。やがて真ん中の道を挟んで23軒の店が並ぶ、大きな市場になったのです。

Sさんのお父さんは赤坂市場の市場長で、乾物屋「高橋保存食品店」を経営していました。砂糖のほか、戦前にもスパゲッティやマカロニなどの舶来品を進んで売っていました。

戦中戦後は、食糧や生活用品の多くを市場で受け取る配給制になりましたが、ここは府立の市場だったため、配給品の質に信用がありました。多くの人がこの市場に登録して、お米、砂糖、マッチなどを受け取りに来ました。

いつも背広の上に白衣を着て市場を見回っていた、Sさんの父。兄弟姉妹七人も店を手伝っていました。しかし、空襲でこの店はすっかり焼けてしまいました。

Sさんの家では、食事はいつも家族・店の若い衆も含め、十数人で一緒に食べていました。若い衆がいなくなつても、家族はいつも一緒に食事をしていたのです。Sさんの父はお酒が入るとよく「ぼっちゃけちゃいけない」と言っていました。「自分の土地はぶち分けてはいけない」という意味だとか。女子が家を出ても「実家が赤坂にある」と言えば、箔が付くからだそうです。



昭和6年頃の家族写真／取材提供写真

※1 赤い鳥 大正～昭和初期にかけて流行した児童雑誌。鈴木三重吉が創刊。童話を中心とした日本児童文学を大きく発展させました。

なんでもこなす肝っ玉母さん

Aさんのお母さんは未亡人でしたが、番頭さんや女中さんと酒屋を切り盛りしていました。忙しい店の仕事の他に、家族や使用人の布団の手入れ、着物や服の仕立て、洗い張りや刺繍までを一人でやっていて、Aさんは母が寝ている姿を見たことがありますでした。いつも着物を着て丸髷を結び、寝るときは箱枕〔※2〕を使用していたお母さん。髪は自宅に來る髪結い（理髪業者）さんに結ってもらっていました。

専業主婦だったBさんのお母さんには、家の歯科医院の手伝いがなく、比較的時間のゆとりがあつたようです。編み物や散歩をして、近所の人とよくお付き合いをしていました。日露戦争後に流行した、洋服に合う二百三高地髷を結っていました。

中華料理店を営むCさんのお母さんは、脚氣を患っていたのに痛いと二言も言いませんでした。趣味の短歌を創る一方、家族の食事や洗濯などの家事を、忙しくこなしていました。近くに寿司屋がなかったので家で寿司を作り、近所にも配っていたとか。赤坂氷川神社のお祭りには、町内会のお揃いの浴衣をよその子の分まで縫っていました。

サラリーマン家庭のDさんのお母さんにとっては、趣味の和歌や詩作と、時々友人との

外出が楽しみでした。子どもが通っているキリスト教の幼稚園のお母さんたちの仲間も、多くいました。

葬儀屋Eさんのお母さんは、店には出ないで裏方を務めていました。大変綺麗好きで日に三度掃除をして、場所ごとに雑巾を換えていました。使用人・家族の食事の世話、寝具の手入れ、父の和服の仕立て、子どもの服の仕立てや手入れを、すべて一人で行っていました。

戦前には、今のように便利な電化製品がなかったため、洗濯は手洗いでしていました。洗い張り、着物の仕立て、炭火を入れたアイロンでのアイロンかけ、寝具の仕立て、綿の入れ替え、食事の世話、掃除など、お母さんたちにとつて家事は大変な仕事量でした。

それでもお母さんたちは、愚痴も言わずに良く働いた一方で、恥を重んじていました。分け隔てがなく親密であっても、「よそはよそ」「うちがうち」とお節介では踏み込まず、個々を重んじた当時のご近所付き合いは、心地良い関係でした。また、「もったいない」「お天道様が見ている」といつて物を大切にし、粗末にすることを子どもたちに戒めていました。たくさんの子供もと、舅、姑までもが同居した、大きな家族の面倒を良くみたお母さんたちは、大忙しでした。

優しいモダンな父

青山北町のFさんのお父さんは、W大商学部を出たあと鍋島侯爵家の土地を管理しながら、経理を務めていました。その上、茶の葉を売る葉茶屋も経営していました。肥前鍋島（佐賀）藩の在郷軍人会の副会長と、赤坂区青山北町六丁目会の初代会長も務めたこのお父さんは、近隣の人の相談を受けて面倒をよく見たため、大層評判がよく、地域の人びとから尊敬されていました。しかし空襲の時、「町内の様子を見に行く」と出かけたまま、帰らぬ人となりました。

「おまえは武士の家の子なのだから『葉隠』〔※3〕を読みなさい。食事中は喋ってはいけない。お金のことは口に出してはいけない。財産は無くても教養だけは身につけなさい。教育こそは財産だと、父からは厳しく言われました。それでも、時には有楽町の劇場に連れて行ってくれて、帰りに銀座でチョコレートシヨップやとんかつ屋に寄ってくれる、大変優しい父親でした」と、Fさんは懐かしみます。

外出の時は行き先によつて服装を変え、背広にはネクタイを、着物には角帯を締める、とてもお洒落でモダンな、優しい父親だったそうです。Fさんの兄弟はとも仲良く、姉とは親子ほど年が離れていたもので、よく面倒を見てもらったそうです。



大正11年頃の台所風景／取材提供写真

衣食住

赤坂・青山の暮らしの近代化

関東大震災を境に、衣・食・住のかたちが大きく変わり始めました。

赤坂・青山では、交通網が整備され、全世帯で電氣が使用できるようになり、ガスや上下水道が普及しました。

商家とお屋敷の住宅文化

商家が建ち並ぶ地域では、道路に面した店舗兼住宅という造りが一般的でした。その多くは、一階が通りに面した店舗で、奥に茶の間と台所。二階が二間か三間の住居部分という造りでした。家によつては、物干し台や、倉庫としての地下もありました。

この時代の家庭は兄弟が大抵5、6人いて、奉公人も2、3人いるのが普通だったので、一家が10人以上の大所帯で住むことになりました。今から考えるとかなり窮屈に感じますが、当時の商家ではこれがごく普通の暮らしだったといえます。多くの家庭では、お風呂には銭湯を利用していました。内風呂のある家にもらい湯をすることもありました。一方お屋敷町では、そのほとんどが二階建て建築で、玄関やお座敷などの5部屋くらいを廊下を取り囲み、応接間もあるような日本風の間取りだったそうです。「床の間に凝ったり、襖絵を絵描きさんに描かせたり

していたので、襖の欄干などを磨いていると、お掃除が午前中いっぱいかった」という話も残っています。こうした伝統的な日本家屋のお屋敷に混じつて三階建ての洋館なども見られ、ピアノやバイオリンの音色が聞かれることも少なくありませんでした。

子どもたちの着るものは洋服へ

関東大震災以前に生まれた世代の人たちは、日常生活も学校生活も着物で過ごすことが多かったそうです。当時の卒業写真を見てみると、確かに大正二桁生まれの生徒たちは着物が多く、先生たちにも着物姿が見られます。しかし、大正二桁の年代に生まれた生徒たちの卒業写真では、ほとんどの子が洋服を着ています。男子生徒は金ボタンに襟のついた制服が多かったのですが、中には背広型に白い襟の付いた制服を着ている子どももいました。

全員冬でも半ズボン。頭は丸坊主。ごく

少数が坊ちゃん刈りでした。ほとんどの子どもは、家のバリーカンで髪を刈ったそうです。女子生徒はセーラー服が多く、セーターやブラウスなどで通う子もいました。これらの服は地域の洋服屋さんにあつらえてもらうか、銀座の洋服屋さんまで買いに行ったとか。戦前の家庭は兄弟が多かったので、お下がりの学生服を着ていた生徒もいました。

キリスト教系の幼稚園や、青山の近くにあつた青山師範学校（現在の都営住宅青山北町アパート）「地図B5左上の付属小学校、また私立の学校に通っている子どもたちも、この頃すでに学校独自の制服を着用していました。昭和のはじめは、子どもたちに洋服が定着した時代だったのです。男子は編み上げの革靴を、女子は中央にリボンなどが付いた、黒の革靴を履いていたそうです。

ちなみに、女の先生は袴をつけた着物姿が一般的な時代でした。



昭和10年頃の子どもの服装／取材提供写真

※2 箱枕 髷がくずれないように工夫された枕

※3 葉隠 江戸時代中期の肥前鍋島藩士山本常朝による、武士の心得をまとめた書。

職業や家庭の中にも日本と西洋が

赤坂の坂下の街や青山通り沿いには商店がありました。少し入った奥には静かな住宅が立ち並び、サラリーマンの家庭や実業家、弁護士、政治家、軍人などが住む、高級住宅地となっていました。

明治維新以降、男性は政治家や官僚だけでなく、普通のサラリーマンも、公的な場所では背広姿に帽子という服装が一般的になりました。特に、赤坂・青山に住むサラリーマン家庭では、夏になると、麻の白のスーツにパナマ帽をかぶり、チョッキに懷中時計、ステッキを持つて出勤する父親が多くみられたそうです。「家にステッキが何本も置いてあった」と語る青山育ちのBさん。朝食はトーストにバター、コーヒーといった、洋風なライフスタイルの家庭も見受けられるようになりました。

しかし商売をしている家では、年中着物を着て店に出ていた父親も多かったようです。仕事には背広で出掛けても、帰宅すると着物で過ごすのが普通だったとか。一方、お母さんたちはいつも着物を着て、丸髷を結っていました。多くのお母さんは、着物を自分で仕立てることができましたが、洋服は外に仕立てに出さなければならなかったので、高価なものだったそうです。



和服を着て改まった正月や祭礼日

日常生活では洋服で過ごすことが多くなっていた子どもたちでしたが、和服を着ることもしばしばあったようです。たとえば、夏祭りには浴衣を着て出かけました。当時の子どもは普段から、夏の湯上がりを浴衣で過ごすことが多かったのですが、こうした浴衣はほとんどが母親の手縫いだったため、兄弟の多い家庭のお母さんは大変でした。

子どもたちは、お正月にも和服を着せられました。新年の挨拶やお屠蘇、おせちの食事などの元旦の行事が終わらないうちは期待しているお年玉がもらえないので、着物を脱ぐことはできず、我慢をしていたといいます。お正月らしい羽つきやカルタ遊びの時

また、青山にかつてあった東栄堂では、当時としては珍しい中華まんや焼売が売られていました。これは中国人の職人による特製の中華まん、で、「おやつには高過ぎて買えないわ」と言われたくらい高級なものだったとか。この職人は後に今も残る有名店に入り、肉まんを作ったそうです。

都市生活を確立した赤坂・青山

関東大震災以後、東京で急激に都市整備が進んだ中で、赤坂・青山もその例外ではありませんでした。全世帯にガス、水道、電気が普及して、水を入れて冷やす木製の冷蔵庫を持つている家庭も多かったといえます。

青山小に通っていたOさんは「私の家族は、一階に3畳と4畳半、6畳の部屋と、台所とお風呂。二階には、床の間付きの8畳と納戸がある、家賃33円の借家に住んでいたのですが、ここには電気、ガス、水道などすべてが揃っていました。戦時中の疎開先では、つるべ井戸だったのでビックリしました」と、当時を振り返ります。

戦後になっても、電気やガス、水道が無かった地域もあった中、戦前から借家にもこうした最新の設備が備えてあった赤坂・青山。生活環境が整備された街で、人びとは充実した都市生活を送っていました

には着物を着たままでしたが、風揚げなどで外で遊ぶ時には窮屈なので、脱ぎ捨てて遊びに行きました。両親、特に父親は、紋付袴姿で隣やご近所、お得意先などにあいさつ回りに出かけていました。

赤坂・青山でのお祭りやお正月は日本風に行われることが主流だったそうですが、洋風化の進んだ家庭では、お正月も洋服で過ごしていたそうです。

カレーライスと海老フライが 日常の食卓に

毎日の食事は一汁一菜。ご飯とお汁におかず一品という、今から考えれば粗末な食事が、当たり前のものでした。それでも、デパートに買い物に行った時や、母親が病気になるって食事を作る人がいないような特別な日には、外でカレーライスや海老フライなどを食べさせてもらうことができました。子どもたちは「こんなにおいしいものがあるのか」と非常に驚いて、外食ができる機会を楽しみにしたそうです。

赤坂・青山の町にはまだ食堂があまりなかった時代なので、これらはほとんどが、銀座や渋谷に行った時のことでした。昭和5年（1930）、銀座の百貨店にお子様ランチが登場しています。もともと銀座と渋谷は、



昭和15年頃／取材提供写真

パン食も次第に浸透

昭和初期になると、町にパン屋さんが登場しました。昭和10年（1935）には青山に3階建てのパンを製造販売するお店ができて、食パン、あんパン、クリームパン、チョコパン、ロールパンなど20種類以上のパンが売られるようになりました。赤坂のパン屋さんでは、バターとジャムを挟んだジャミバターやサンドウィッチなどが売られていて、時には学校にも売りに来たので、子どもたちはこれをお昼に買って食べたそうです。アメリカ大使館

「地図C1左」の前にはかつてアメリカンベーカリーというパン屋さんがあり、周辺に住む外国人や日本人がパンを買っていたといえます。子どもたちや高台のお屋敷の生活に、だんだんとパン食が浸透し始めました。

自分たちで創る遊びは、こんなにも楽しかった

大人たちが殺伐としていた戦時中にも、子どもたちは楽しむことを忘れませんでした。物資が不自由な中で、工夫をこらしては遊び方を開発したのです。

三角ベースにおままごと、探検ごっこ。緑豊かだった赤坂・青山には、格好の遊び場がいくつもありました。

人気の遊び場

子どもたちは、町内の路地や空き地の遊びに飽きると、十分に時間が取れる日曜日や夏休みに、新鮮な刺激を求めて遠出ししました。小学校高学年の子が小さな子の面倒をみながら、みんなで手をつなぎ、歩いて出かけていきました。

赤坂見附から喰違見附「地図A2中央」にかけての弁慶堀「地図A2」には、蛭がたくさんいました。釣りが禁止されている宮城の外堀で隠れて釣りをして、お巡りさんに追いかけられたこともありました。喰違見附は高台になっていて、まわりに障害物がなく、どの方向の風が吹いても風がよく揚がる場所でした。また土手が長いので、滑り降りる遊びもできました。

かつては車の乗り入れが禁止されるほど厳しく管理されていた明治神宮外苑内でしたが、戦後の混乱期には放置されてしまします。このため木に登って銀杏やシイの実を

取ったり、噴水池で水浴びしたりと、子どもたちの遊び放題だった時期もありました。

その近くには、青山霊園「※1」と、今は無くなつた鉄砲山「地図B4下」がありました。青山霊園は都区部で随一の広さがあつたので、方々から子どもたちが遊びに集まりましたが、それぞれのグループで、お墓を陣地に見立てた戦争ごっこ、鬼ごっこ、木登り、夜の肝試しなど、遊び方も遊ぶ区域もさまざまだったようです。夏のセミやトンボ取りは、頭や腕、足を蚊に食われて、肌ガボコボコになることを覚悟しなければなりませんでした。

当時は誰もが遊びに行つた通称鉄砲山「※2」は、一面が笹の小山となつていて、射撃演習が無い日には子どもたちが自由に出入りしていました。銃弾を拾って電車に轢かせてナイフを作る、葉きようで判子を作る、ござで滑り降りる、山裾の雨のたまる草むらに放置されたトロツコに乗る、トンボやバツ



お正月は羽根つきと凧揚げで

昭和のはじめ頃の男の子は、近所の子ともたちと仲間を作り、ガキ大将の下で、普段身近で遊ぶ範囲を決めていました。よそ

さようならガキ大将

昭和のはじめ頃の男の子は、近所の子ともたちと仲間を作り、ガキ大将の下で、普段身近で遊ぶ範囲を決めていました。よそ

※1 青山霊園 総面積27ha。明治7年(1874)、青山墓地として開設。昭和10年(1935)から青山霊園の名称に変わりました。
 ※2 鉄砲山 陸軍青山射的場。一部は現在の青山葬儀所の敷地にあたります。明治14年(1881)、小銃射撃の流れ弾を防ぐため、コの字の土手が築かれたが、昭和初期にはこれらが削られ、いくつかの小山になっていました。
 ※3 坊主めくり 百人一首の絵札を積んで、順にめくって取り、坊主札が出れば手札がすべて取られ、姫札でを引くとそれを手に入れる事が出来ます。最終的な取り札の数を競いました。



の縄張りで遊ぶことはありません。この決まりが尊重されている限り、隣のグループとの摩擦はありませんでした。ただし、違う小学校の区域が縄張りに接するととなると、学校同士の対抗心があるので、そううまくもいかないのです。青南小と青山小では、青山通りを境にして、攻めたり攻められたり喧嘩が絶えなかつたと言います。

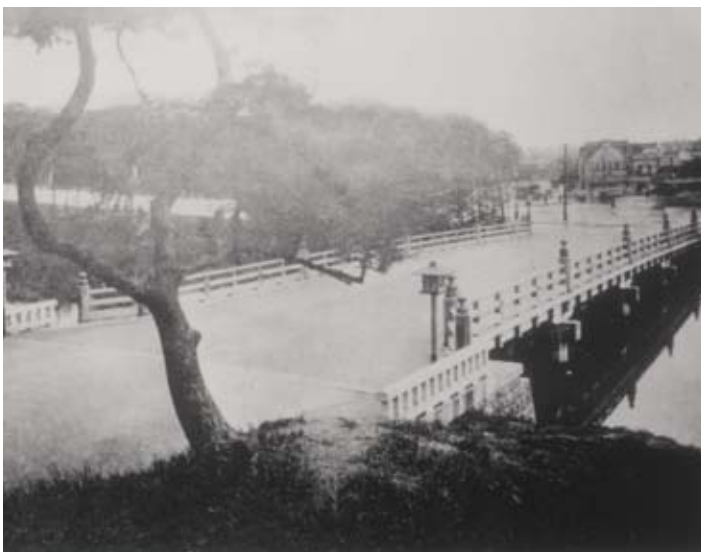
ガキ大将には、最上級生であることと、仲間を守るための相応の腕力、また町内の出来事や遊び方をよく知つて、仲間を統率するための知力が必要でした。子どもたちは、ガキ大将から多くを学んでいました。ガキ大将が率いるグループの規模は、ある時には南北に走る青山墓地通り「地図B4左」の250メートルの間に、15人程の仲間が3つできていたことから、だいたいの想像できると言います。

表参道で老舗の質屋を営んでいたYさんも、青山でガキ大将を務めた歴代のひとりです。当時の子ども同士は喧嘩には「首から上を殴つてはいけない」「鉛筆削りや工作用の刃物を持ち出してはいけない」などの作法が存在し、これらは代々のガキ大将に申し送られた決まり事だったそうです。「小学校卒業と同時に引退するのがならわし。これで子ども時代にさよならつてわけだ。」と語るYさん。たしかに中学生は、子どもたちにとつて大人っぽい存在に見えていました。

ベーゴマ

ベーゴマ遊びは、男の子たちに絶大な人気がありました。経験しない子はまずいなかったでしょう。家から桶や洗面器を持ち出して、畳表やシートをかぶせて水で濡らし、窪みを付けたものを、床と呼びます。この床の中で、相手と直径3センチ程の鉄ゴマを廻し、弾き飛ばすか逆さにすればそのゴマがもらえるのが、ベーゴマ遊びの基本的なルールです。

ベーゴマは賭博性が強いので、たびたび小学校の先生から禁止されていました。そのため、子どもたちは目立たないよう路地裏などに数人で集まって、熱中しました。「ベーゴマを入学試験の前日までやっていて先生にしかられた」とは、赤坂小に通っていたNさんの話です。戦時中の金属回収運動によって、鉄ゴマを国に献納したり売ったりしたので、一時はベーゴマで遊べなくなりましたが、戦後再び大流行しました。子どもたちが、駄菓子屋で買ったゴマをそのまま使うことはまずありませんでした。コンクリート道路や、連隊やお屋敷の塀に擦り付けて削り、ベーゴマの頭を六角や八角形にしたり、背を低くして尻を針のように尖らせてたりして、強いコマに仕上げるために努力しました。※4 こうして作り上げたコマを、シンシウガンと呼んで宝物としていました。ベーゴマ遊びでは、唾をつけたたりなめたりし



昭和5年 弁慶橋／帝都復興事業大観 港区立港郷土資料館所蔵

た紐をしごき、きつちりとコマに巻きつけて、勢いよく床に入れることが基本です。その上で、逆回転のコマを入れるのも必勝法のひとつでした。「左ききが投げた逆回転のコマとぶつかる」と、相手のコマは反発して、トロトロに弱まる率が高い」と、Iさんは言います。勝負に勝つためには、コマを傾けて相手の下の部分に頭を当てる、相手に離れた位置にコマを入れて相手の回転が鈍るのを待つ、相手にぶつけてコマを入れるなどの技が必要でした。「戦時中の金属回収で兵隊に行くときに売ってしまったが、1000個位は集めた」という氷川小のMさんは、相当に高い技術を持っていたのでしよう。

首相と草野球

戦争が激しくなり、敵国アメリカのスポーツだと敵視された二期を除いて、野球はずっと男の子たちの大好きなスポーツでした。

戦前には、近くの道路で手軽に野球が出来る、三角ベースが流行しました。赤坂の二ツ木通りでもやっていたと言います。当時は、電車通りから少し入った道なら車も自転車も通りません。ゆつくりと荷馬車が通る時には、ゲームを中断してやりすごせばよかったのです。そんな時にはついでに、馬を扱うため前向きに座っている御者に気付かれないように、荷台の後ろにチョンと乗る位いたずらができました。

三角ベースでは、道路の中央にホームベースを書き、電柱などを代用して、1塁と3塁にします。2塁はありません。1チームは6人もいれば十分。ピッチャーは軟式テニスボールを下手かゴロで投げますが、ボールをギュッと絞って投げると変化球が出せます。バッターは手打ちか、棒切れを使います。戦後に野球が復活したときは、子どもたちは木や布を使って、ボール以外の道具を全部自分たちで作ったものです。

昭和のはじめ、溜池町「地図C1左上」に住んだTさんは野球少年でした。その頃のことを、「野球ばかりしていた。首相官邸の横にあった鍋島原っぱ※5でも、よく野球をした」と語



当時男の子なら誰だってやったべえごまだ。ケットンと言って、こまの先を研いてとんがらせ、床（べえごまの土俵）へぶっ込むと、プーンとうなりをたてる。角も六角にして相手のべえごまをすっ飛ばすんだ。強いべえごまを作ると勝って何個も手に入る。学校では禁じられていたので路地裏に隠れて遊んだ。

ります。時には、官邸の警備の人がゲームに加わったり、首相本人に励まされたこともあったそうです。また、野球の最中に永田町の子どもたちが来て「どけ」と言われ、けんかになりにかけたところを、官邸警備のお巡りさんに「やめい」と仲裁してもらったことがあります。

子どもたちは、官邸の人たちに大いに親しみを持っていました。特に、二・二六事件直前の頃の岡田啓介首相※6が、ニコニコ顔で近づいてきたとき、子どもたちは並んで頭を下げました。岡田首相にずいぶんと声をかけてもらったことが忘れられないと、Tさんは語ります。

戦車の轟音

青山高樹町「地図C6」の子どもたちは、日曜日ともなれば代々木練兵場へとよく遠征しました。渋谷側の台地部分から排水が集まってくる場所（現国立競技場辺り）は、トンボなどの昆虫類がたくさんいる沼地になっていました。が、そこには子どもが潜り込めるくらいの大ささの、練兵場の奥から引かれた排水管の出口がありました。

大正14年生まれのDさんは、何人かの仲間と冒険と称して、この管に入ったことがあるそうです。50メートルほど先に見える、マンホールの上から差し込んでいる光を頼りに這い進



大正15年 神宮外苑いちよう並木入口にあった青山児童遊園／写真提供：明治神宮外苑

女の子はどうしてる

男の子が小学校から帰るとすぐに外に飛び出して遊び、夕暮れまで帰らないのが当たり前だった頃でも、女の子の場合は様子

違っていたようです。

小学校では男女別のクラスで別々に遊んでいても、家に帰れば、女の子も男の子と一緒に遊びました。大きなお屋敷に忍び込んで木登りをしたり、虫取りや池のザリガニ取り、草っぱでは縄跳びや馬跳び、徒競走を、また戦争ごっこで看護婦となって参加するなど、外で活発に遊ぶ女の子もいました。

一方で遠くに行かずに、近くの路地に出て、飽きることなく女の子同士のままごと、ごっこ遊び、ゴム段や手まり遊びをしたり、家に遊びに来た子と母親の作ったお手玉を使ったり、おはじき、あやとりなどをしている子もいました。

明治神宮外苑「地図A4」のいちよう並木脇にあった児童遊園※7や、梅窓院「地図B5」内にあった滑り台、ブランコ、シーソーなどの遊具は当時では珍しく、女の子にも人気があったので、普段は家で遊んでいる子たちも誘い合つて出かけたと言います。家のしつけが厳しく、外で遊べない子は、お屋敷の中で訪ねてきた友達かペットと遊んでいたそうです。

また、忙しく家事を切り盛りしている母親にとって、女の子は何かと助けになる存在でしたから、学校から帰るとすぐにお使いや家事の手伝いをしたり、幼い弟や妹の子守をしなくてはならないので、なかなか遊ぶ時間が無い子もいました。

※4 ベーゴマ
戦後には大きめのものや、アルファベットの文字が入ったもの、すでに角が付いたものなどが出てきました。
※5 鍋島原っぱ
大正12年(1923)まで鍋島侯爵家の本邸があったことからの呼び名です。
※6 岡田啓介
慶応4年(1868)～昭和27年(1952)。海軍大将、海軍大臣、二・二六事件当時の内閣総理大臣。事件後、岡田内閣は総辞職となりました。
※7 児童遊園
外苑48haの一部で、総面積は3.8ha。大正6年(1917)から始められた外苑造成の際に、国産品の範例とするため遊具10種がアメリカから輸入され、据え付けられました。

大人も子どもも大好きだった縁日

歴史ある寺社が多い赤坂・青山では、街のあちこちで縁日が賑わいました。露店での買い食いや遊びを心待ちにしていたのは、子どもたちだけではありませんでした。大人たちもまた、縁日を待ちわび心を弾ませていたのです。

一ツ木通りの縁日

赤坂や青山周辺には、寺院や神社がたくさんあります。もともとは、神社や寺院で神仏に縁のある日を選んでお祭りが行われることを、縁日と呼んでいたのです。この日にお参りすると普段よりご利益があると信じられていたため、縁日には多くの参詣者が集まりました。そこにお参りの人びとに向けた露店がたくさん集まったことから、縁日の賑わいが生まれてきたのです。

赤坂の一ツ木通りで、毎月1のつく日に行われていた赤坂不動尊「地図B2上」の縁日と、6のつく日の浄土寺の六地藏「地図B2」の縁日は、特別に大きなものでした。戦前には、青山通りから山王下通り（現赤坂通り）「地図B2」まで、一ツ木通りの両側に所狭しと露店が並び、六本木や青山、四谷、麹町、番町などからも、多くの人が訪れました。これは周辺の縁日に比べても盛大なもので、多い時には通りの反対側が見えないほどの混雑だったと

います。夜遅くまで灯る露店のカーバイトライトのアセチレンガスの匂いに、気分がわくわくしたという話が残っています。

縁日には、いろいろな店が並んでいました。ヨーヨー、金魚すくい、焼きそば、衣類や履物の店、飴屋、まわり灯籠、虫屋、おもちゃ屋、古本屋、駄菓子屋、バナナの叩き売り、小鳥屋、色とりどりのリボンを売るリボン屋、電気飴（綿アメ屋、植木屋に加え、バイオリン弾きや占い師、ろくろ首などの見世物屋、当時ドイツからやってきた飛行船の形を真似たツエツペリン焼きなど、たくさん露店が出ていました。その場で楽譜を売るバイオリン弾きと一緒には、客たちも歌をうたっていました。「口上を述べながらの飴売りの歌が楽しかった」という人もいます。

子ども達は、貯めたお小遣いを握り締めて、わくわくしながら縁日に向かったものです。「夏には浴衣姿で連れ立って屋台をはしごしながら夕涼みするのが家族の楽しみだった」という懐かしい思い出話も。一ツ木通り

たといいます。

青山善光寺の縁日は、8のつく日が開催日。バナナの叩き売りや綿アメ、カルメ焼き、スイカの叩き売り、五目将棋、大道詰将棋「※1」などの店が出ていました。なかなか詰将棋の店主には勝たせてもらえず、お金がすぐなくなつたそうです。また家庭によっては、「露店の食べ物衛生面の問題がある」「女の子が買い食いなんてとんでもない」と親に言われ、食べさせてもらえなかったことも。実際お腹をこわしたという人もいました。戦争が激しくなるまで、青山善光寺の縁日は200mに渡りました。最後の方に並ぶ植木屋さんのあたりでは、子どもたちは退屈したとか。

大山街道（現青山通り）沿いの梅窓院の縁日は、この寺の参詣者や周辺の人、伊勢原市にある大山阿夫利神社への参拝者などで賑わい、露店が現在の外苑前郵便局のところまで広がっていたといひます。

寺院や神社の縁日はいつも賑やかに

赤坂では一ツ木通りの縁日が有名ですが、「赤坂の山王さん」と呼ばれ親しまれた



昭和15年 善光寺
赤坂区史蹟写真帖 港区立港郷土資料館所蔵

同じく8のつく日には、霞町鬼子母神（現在の西麻布）の縁日もありました。これも戦後開かれなくなり、昭和45年に鬼子母神は青梅市に移転しました。また、渋谷の金王八幡宮や青山熊野神社の氏子には青山の人も多いため、そのお祭り縁日は、ことさら楽しみにされていたそうです。



赤坂のお地藏さんの縁日は1と6の日。ボクらは5銭もらって古本屋の前にいつまでもどっかり。足がしびれるまでしゃがんで読みふけたものだ。「にいちゃん、いいかげんにしなよ」と云われるまで読んでいたのは、「塚原ト伝」「宮本武蔵」などなど。

の縁日は、昭和50年代後半に完成した電線の中地化と歩道の創設により勢いを失い、次第に姿を消してゆくことになりました。

青山善光寺と梅窓院の縁日

青山の人たちにとっては、青山善光寺「地図B6右」と梅窓院で開かれる縁日が楽しみだった

戦前には、現在よりも頻繁に、そして定期的に行われていた縁日。子どもから大人まで楽しめる、暮らしに欠かせない娯楽だったようです。

縁日の楽しみ



一ツ木通りをところ狭しといろいろな出店が並ぶ。唐辛子屋、いかがわしい手品や詰将棋、万年筆、本屋、よれよれ袴の書生風がキーキーとバイオリンを弾いて唄っている辻演歌。

古本屋の前で、足がしびれるまでしゃがんで本を読みふけたA君。女の子がたくさん来ていて、その浴衣姿を見るのが楽しかったというB君。お小遣いを貰い、露店をはしごしながら、自由に好きなものを買ったり食べたり。この日のために貯めたお小遣いで縁日をどのように楽しむか、知恵を絞ったこともいい思い出といひます。たとえば、アイスクリームは10銭ですが、アイスクャンデーは8銭。2銭を浮かせて他の物を買うところに、楽しみがあったのです。

「仕事でいつも着物に前掛けをしていたので、縁日では大胆な柄のシャレた前掛けを買いたくて、楽しみにしていた」とCさん。お店や娯楽の場が少なかった戦前、多くの大人も縁日を楽しみにしていました。

※1 大道詰将棋 公園や縁日などの露店に持ち込んだ将棋盤で出題された、賭け将棋の一種。客は一手ごとに小額を支払って、王将を詰めることに挑戦しました。

変化に富んでいた赤坂・青山の風景

緑深い武家屋敷と、活気溢れる商店街と、人々が暮らす住宅街、そして華やかな花柳界が肩を寄せ合っていた赤坂・青山。通りごとにめまぐるしく表情を変える、とても不思議な街でした。晴れた日には、市電の通る青山通りから富士山が見えました。

江戸時代から現代へ続く街並み

昭和40年くらいまでは高層ビルがまだ数少なかったため、赤坂・青山からも富士山が望めました。かつてのこの街は、豊かな緑と、軍の施設、お屋敷町、寺社、商店街、花街、家々の黒板塀など、さまざまな顔を持っていたのです。

江戸時代には、大名屋敷や武家屋敷が並んでいました。町民は一ツ木通り「地図B2右」あたりなどに小さくまとまって住んでいて、わずかな田畑もありました。また現在の溜池山王駅周辺には大きな溜池があり、これが江戸城の外堀の代わりをしていました。

明治維新によつて天皇が東京に移った時、それにしたがって公家たちも東京へ移住しました。また江戸時代の大名屋敷や武家屋敷は、明治維新で功労のあつた政治家、軍人たちの住まいとなりました。こうしたお屋敷の中には、洋館や、日本と西洋の様式が混在する和洋折衷の建物もありました。あちこちにあつた屋敷森にはイタチが住んでいて、昭和10年（1935）くらいまでは、屋敷の庭や

民家に顔を出していました。

明治から昭和初期にかけては軍隊が力を持っていたため、大きな大名屋敷跡は軍隊の施設になりました。特に赤坂・青山に多く、陸軍大学校や歩兵第二連隊では、立派な門の奥の建物を囲んで、塀がどこまでも続いています。自動車の無い時代でしたから、軍の将校たちは馬に乗って移動しました。そのため、青山通りには馬糞がたくさん落ちていたのです。

軍の施設は二階建てや中層がほとんどで、高い建物はありませんでした。映画館の葵館「地図C1上」、劇場の演技座「地図C1左上」、塔が素敵だつた霊南坂教会「地図C2右」、青山脳病院「地図B5下」、アメリカ大使館をはじめとした各国大使館、大倉集古館「地図C1左」、青山師範学校、赤坂区役所「地図B2左上」なども皆低層で、モダンな建物でした。

戦後、焼け野原になった赤坂・青山。軍の施設跡に都営住宅が出来たり、分譲された土地に木造二階建ての家々が建ちはじめて、にぎやかな街になりました。大きなお屋敷はほとんど無くなって、商店街が出来ていきます。

為右衛門の手形と墓がある報土寺「地図B3右」、縁日で有名だつた浄土寺の六地藏のほか、元赤坂の豊川稲荷東京別院は、花柳界や芸能関係者の信仰を集めていました。これらの寺社は、赤坂氷川神社、山王日枝神社と共に、時代を越えて今も人々の信仰を集めているのです。

青山の街並み

昔の青山は今とまるで違っていました。たとえば、明治時代から市電と呼ばれ、昭和18年に東京都電となった路面電車が通っていた青山通り。その道幅は、現在よりずっと狭かつたのです。

大きく立派な青山善光寺が、青山の中心でした。仁王門の両側には仁王さんが立ち、中に入ると鳩がたくさんいました。港区と渋谷区の境にあたる神宮前5丁目付近から、表参道ヒルズと神宮前3丁目付近までを含む、広大な広島藩浅野家下屋敷の鬱蒼とした木々は、「浅野の森」と呼ばれていました。このような広い庭を持つお屋敷の多い、自然豊かな街でした。

青山北町（現北青山）は中型住宅が多く建つ住宅地で、ここには医者横丁や交番横丁などがあり、細い路地に木造の家と店が並んでいました。この町には、陸軍大学校「地図A4下」

青山通りにも、一階がお店で二階が住まいとなつた店舗が並ぶようになりました。

青山通りには市電が走り、昭和39年（1964）の東京オリンピックの前には、18メートルだつた道幅が40メートルに広げられました。街は様変わりし、日常生活に結びつく商店が次第に姿を消しました。道幅を広げる工事のために引越した人も多く、大きな通りに分断された青山南町（現南青山）と青山北町（現北青山）の交流は、疎遠になつていったそうです。

オリンピックに向けて首都高速道路が建設され、皇室や軍関係の土地だつたところには、ホテルやビルが建ち並ぶようになりました。商店街はビル街となり、オフィスやマンションが多くなってきました。

赤坂の街並み

花街の料亭や待合がたくさんあつたとはいえ、その隣に餅屋があつたり、そば屋や酒屋があつたりと、赤坂の街の中では、いろいろな商

や、青山師範学校、女子学習院「地図A4下」もありました。戦前の青山師範学校付近は洋服屋ばかり。当時から、青山はファッションの街でもありました。また、素敵な洋館も建っていました。

戦後、大使館が多かつた赤坂・青山には外国人の居住者が増え、外国人向けのマンションや教会ができました。窓に横文字が並んだ欧米風のスーパーマーケットは、外国人のたまり場になりました。

青山南町（現南青山）にも大きな屋敷が多く、特に表参道付近には、鉄道王と呼ばれた根津嘉二郎や、政治家大隈信常らの大邸宅「地図C5左上」がありました。政治家、実業家、軍高官の豪邸が立ち並ぶ、静かなお屋敷町だつたのです。またこの南町には、青山警察署「地図B5左」と青山脳病院がありました。現在の赤坂消防署付近には青山斎場（青山葬儀所）「地図B4左」があり、ここでは政財界や軍幹部の葬儀が多く行われました。

青山通りには商店が立ち並んでいました。コンクリートブロックの歩道に街路樹のアオギリが植えられた、落ち着いた街でした。東京オリンピックの開催予定年だつた昭和15年（1940）には、青山通りの街灯に五輪マークの飾りが取り付けられましたが、これは第二次世界大戦で中止。幻のオリンピックとなりました。

※1 冠木門 左右の門柱に横木をかけた門。

【赤坂の起源】

かつて赤坂見附から四ッ谷へ上る紀伊国坂の上には、染料として利用される茜草が生えていました。ここから「赤根山」と呼ばれるようになったこの山へ上がる坂を「赤坂」と称したと伝えられています。「染物屋が坂に赤い綱を干したから」という説も。

【青山の起源】

徳川家康の重臣で、赤坂から渋谷までの広大な土地を拝領した青山忠成以降、代々その土地を治めた青山家の名が起源とされています。江戸時代に青山家の敷地の一部が町となり、青山を冠する町名がつけられましたが、本格的に広域地名として認識されはじめたのは、明治以降といわれています。



戦前の青山通りを進む葬列／取材提供写真

青山二丁目の交差点には、二階建ての八百屋、肉屋、本屋、薬店、喫茶店などの商店が並び、その合間に地下鉄の駅へ続く階段がありました。

戦前の青山北町には、鈴木硝子店というお店がありました。当時、品のよい小学校低学年くらいの男の子が、この店先で毎日金魚を眺めていました。ある日この少年が女性に連れられて金魚を買いに来たので、後からお屋敷に届けに行つたところ、なんとそこはとある宮家の邸宅だったとか。この男の子はその家の子弟で、四谷の学習院初等科へ通う行き帰りに、この店の金魚を眺めていたのです。



取材提供写真

丹後坂「地図B2中央は、米倉丹後守の屋敷が東北側にあったことから名づけられたと考えられますが、あまりに急な坂なので、いつしか100段近くある階段となり、「丹後段々」と呼ばれるようになりました。

右上は、薬の材料である薬種を砕く器具の薬研に似ているので、こう呼ばれています。今はだいぶなだらかな勾配となりましたが、以前は青山通りに上る途中で、止まった車が坂からずり落ちてくることもあったほどです。

市内電車大好き

現在の都内には都電荒川線と東急世田谷線を残すだけですが、かつて路面電車は、旧市内を中心にした市民の足であり、赤坂・青山にも、東西に走る幹線と、南北に走る支線との、計6系統の市電が走っていました。

運転手さんは常に仁王立ちをして、左手はスイッチのハンドル、右手はブレーキのバー※1を握りながら、進行方向をじつと見つめています。停留所では、乗降ドア（4輪電車では客室ドア）を開閉し、お客に声をかけて切符を受け取りました。

車掌さんは市

電の「華」でした。市電の運賃は、乗り換え券付きで7銭。朝6時半（冬は7時）までに乗れば、片道5銭、往復9銭で、しかも復券の使用はフ

つい乗り遅れても、男ならひと停留場を駆ければ追いついたものだ。



※1 ブレーキのバー

支線の4輪電車では、スイッチはバー、ブレーキは手動の大ハンドルでした。

坂の街

「青山」には急な坂も有名な坂道もほとんどありませんが、「赤坂」は坂の街です。ほんの近くに行くためにも、坂を上ったり下ったり……。江戸時代から赤坂の歴史を見守ってきた坂道には、かつてそこにあった武家の屋敷や、寺社に由来した名が付けられることがありました。中には当時の人びとの生活が感じられるような、素敵な名を持った坂もあります。

商店・商店街

暮らしと時代のありさまを映す商店街

一ツ木通り、鈴降横町、田町通り、みすじ通り……現在なおその名を残し、多彩な魅力に溢れた赤坂の商店街。青山では、ファッションの街として知られるずっと以前から、地元の商店の数々が人々の生活を支えてきました。

一ツ木通りと鈴降横町

一ツ木通りの名前の由来は、かつて「人継村」と呼ばれていた事からだとか。ここでは寺社と縁日、そして商店街が混ざり合い、共存共栄の賑わいを見せていたことを、多くの人が伝えています。

一ツ木通りには、様々な日用品を扱う店が並んでいました。たとえば変わったところでは、竹の皮屋があります。昔は殺菌作用がある竹の皮を、お弁当などの食物を包むために利用していたのです。

この他にも、白砂糖、黒砂糖、花砂糖といった色々な種類の砂糖だけを専門に扱う店や、一年中風を売っている専門店などもありました。ロウソク屋、経師屋、屋根屋、車屋、家具を作る指物師、糸屋、足袋屋、小間物屋、畳屋、駄菓子屋、お菓子屋、本屋、豆腐屋、佃煮屋、芋屋、せんべい屋、化粧のための紅屋、雑貨屋、アサリ屋、仏具屋、自転車屋、喫茶店、肉屋、魚屋、銭湯、などなど。一ツ木通り

だけで、生活に必要なほとんどの物を揃えることができました。M屋のアイスクャンデーは、当時とても有名でした。

一ツ木通りにあった交番「地図B2右上から円通寺の上り口、近衛連隊の裏門のあたりまで伸びる鈴降横町にも、商店がたくさんありました。この商店街は横に並んだデパート風のもので、豆腐屋、魚屋、靴屋、経師屋、カフェが2軒、洋服屋、車屋、駄菓子屋、自転車屋、食堂、銭湯、屋根屋などが揃い、こちらでも日用品には事欠きませんでした。

艶めく花街・田町通りと中通り

田町通りでは戦前から軍人たちが通う料亭が増えはじめ、通りの両側にびつりと料亭や待合が並んでいたそうです。中通りには豆腐屋、鍛冶屋、洗ひ張り屋、仕出し料理屋など、職人の店が多くありました。

当時を知る方は、「赤坂の料亭さんと取引していれば、良いものは言い値で買ってくれる



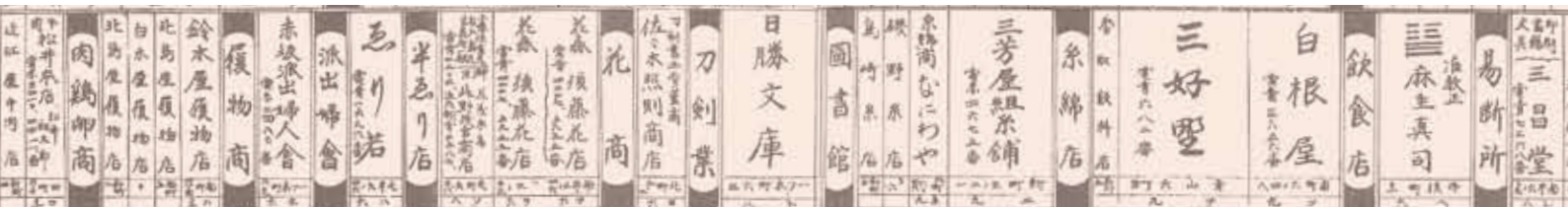
「はいよっと!どいたどいた」。威勢のいい車屋さんが贅付け油のぶんぶん匂う綺麗どころを乗せて颯爽と走ってゆく。赤坂田町でよく見られる風物詩だった。「あたかも、あんなきれいなお姐さんになりたい」と女の子は思ったか思わなかったか。

ので、商売を回していける。昔は、赤坂のただけで食べていけるゆつくりとした町だった」と、懐かしそうに話します。

一ツ木通りを境にした東側は、いわゆる花柳界。山の手に住む人々や子どもはあまり足を踏み入れることのなかった、下町の風情が粋な界限でした。その中間に位置する中通りは、三味線の弦にちなみ、戦後みすじ通りと命名されました。



赤坂小学校へ通う近道に丹後坂のクノ段々と云われる名所?がある。犬のうんこが各所にあつて、うっかり歩けない。土道のこの辺ではかなり大きい坂道だった。現在は美しい石段になっている。(昭和11年)



溜池の果物屋さん

溜池の果物屋で育ったSさんのお話です。
「赤坂の芸者街へ、果物をよく運んでいましたよ。かごに入れてリボンをつけて、今でいう果物かごっていうのかな。お客への土産に持たせたんでしょうかね。母は非常に小回りのきく働き者で、評判がよかったです。だから、母に配達してほしいっていうご指名があるほどでした。母の他にも兄弟が運んだり、僕が運んだこともあったなあ。時には花街のおかみさんが取りに来たり、使用人が来たりしたこともありました。配達だけじゃなくて、お店で『いらっしゃい』とお客を呼ぶこともしましたよ。近くに果物屋は二軒しかなかったけれど。」
昭和初期の溜池付近は、落ち着いた雰囲気

の街でした。Sさんの家の近くには、うなぎ屋、寿司屋、ブリキ屋、薬局、米屋、八百屋、お惣菜屋、佃煮屋、パン屋、食堂、喫茶室がありました。自動車を売る店や、溜池自動車練習所もあったとか。
「夏の夜には、よく家の近くの原っぱにギンヤンマ採りに出かけました。空き地の蚊や小さな虫を食べに、ギンヤンマがたくさん来ていたんです。その頃は竿にモチを塗って採ることが多かったけれど、僕は自転車のチェーンの中のバラ玉を使って、トンボを採っていました。モチを使って採ると、トンボにモチがべっ

戦前までは自転車とリヤカーで行われていた配達には、戦後からバイクやトラックが使われるようになりました。

霊園のお茶屋は寛ぎの場

昔は電車道とも呼ばれた青山通りから、青山墓地にいたる墓地通りの中ほどに、青山斎場がありました。周辺には、生活のための店に混じって、墓地や斎場に関係した、石屋、テント屋、茶屋、花屋、造花屋、葬儀屋など



青山通り／取材提供写真

たりくついて、羽がダメになっちゃうからね。バラ玉を黒い紙に包んで、黒い糸をつけて投げると、それがトンボに絡んでトンボが落ちてくる。それを素早く拾って捕まえたんだ。両手いっぱい採って帰ってきて、家の果物屋にばつと放す。そうすると、明りに集まった店の中の小さい虫を食べてくれるの。で、明け方に戸を開けて、みんな放してやる。単なる遊びだけじゃなくて、店のためでもあったんです。」そのため、羽を傷つけない方法でトンボを捕まえていたのだそうです。

商人が御用聞き

表参道付近では、青山通りや、この大通りを南東に入った長者丸通り「地図B5中央沿い」に商店が並んでいましたが、その一本奥はお屋敷が並ぶ住宅地となっていました。お屋敷で暮らす人たちは、わざわざお店に買い物には行きません。店の従業員に屋敷へ通ってもらうて、好みの商品に必要なだけ届けてもらう「御用聞き」を利用するのが普通でした。御用聞き商売をする店が、こうしたお屋敷に売り込みに行つて、他のお店の得意先を取るようなことはありませんでした。今の得意先を大切にしていけば、十分に商売をやつていくことが出来たためです。どこかのんびりとした、大名商いとも呼べるものでした。

のお店が点在していたのです。

霊園の茶屋は、墓参者をもてなす店でした。基本的に食事メニューがなかったこの店では、お茶を飲むことが出来ました。明治の中頃から続く青山霊園の茶屋で、四代目の主人を務めるOさんは、こう語ります。「昔の人はお参りに来ると、うちでお茶を飲んでおしゃべりして、お花、お線香、仏様にお供えするお櫛【※1】などを買つてからお参りしていたんです。しかし今では、車でばつと来てお花を買つて、すつと行っちゃう。お参りの仕方が、昔とは変わりましたね。昔は、どこかのおなじみさんがお墓参りに来たら、私のおふくろなどと、何をあんなにしゃべることあるのかなあというくらい、長い間お話していましたよ。」

霊園の茶屋でお茶をいただき、お花を買つてお参りする。心が安らぐ、なつかしいお墓参りの風景です。

変わる青山、変わらぬ青山

青山通りで呉服店を営むKさんに、昔のお話を伺いました。

「戦前には、長者丸通りの船光稲荷神社「地図B5中央」の前に店がありました。当時は染物屋をしていて、洗い張りも手がけていました。まだ着物で暮らす人が多かった時代です。季節に合わせて雰囲気や好みなどを色々考え



昭和16年 一ツ木通り／赤坂区史 港区立港郷土資料館所蔵

長者丸通りには、八百屋・銭湯・果物屋など、日常で使うものがほぼ揃っていました。同じ通りの少し離れたところに酒屋が二軒ありましたが、双方とも御用聞きで商いをしていたので、店頭呼び込みや賑やかなセールを行うようなこともなく、ゆったりとした雰囲気がありました。

こうした御用聞きの商品が浸透していた青山には、買い物籠を下げた人は少なかつたそうです。米屋、八百屋など個人の専門店で済ませることが多かったといえます。

て、お得意さんの着物をトータルコーディネートしていました。」

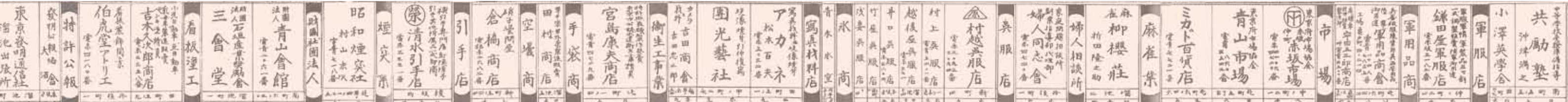
着付けには、着物の他にたくさん的小物が必要とします。現在は無くなってしまいましたが、表参道にはかつて着物の小物屋があつたそうです。

当時の青山通り沿いには、何でも揃う「青山市場」「地図B5中央」がありました。昭和39年に開店した、日本初の24時間営業スーパーマーケット・青山ユアーズ（昭和57年閉店）の前身となつたのは、この市場内の精肉店でした。現在も青山通り付近には、市場のあつた頃から続くお店がいくつか存在しています。

青山は空襲で焼け野原になったため、昔の建物はほとんど焼けてしまいました。戦後に店舗をなんとか建て直しても、今度は東京オリンピックに向けた道路拡張のために、青山通り沿いの店は移動させられました。このように何度も転機があつた青山で、戦前からの商店が生き残ることはとても難しいことだったのです。

「昭和の青山には、ゆったりとした雰囲気のお店がたくさんあつた。今は青山といえば、おしゃれな街というイメージだろうが、昭和の頃の青山のイメージ、青山らしさを忘れてほしくないな」Kさんはしみじみとそう語ります。

※1 櫛 仏様にお供えする木



花街の粋を支えた赤坂の街

唄や踊りで客を楽しませる芸者を呼ぶことが出来る、高級料亭が建ち並ぶ一角は、いわゆる花柳界と呼ばれる地域です。つまびく三味線の音が漂うこの界隈の粋なありさまも、赤坂という街が持つ表情のひとつでした。

「花柳界」ってどんな世界？

江戸時代、風光明媚な溜池周辺には、茶や食事を楽しむ人々が集まるようになりまし。やがてここに歌舞音曲をお客に見せる女性たち、つまり赤坂芸者が登場したのです。明治5年（1872）には、赤坂は政府の公認を受けた花柳界となりました。

料亭〔※1〕や待合茶屋〔※2〕の座敷に呼ばれ、日本舞踊、三味線、唄などの芸を披露し、お客さんをもてなす人々を芸者と呼びます。花柳界とは、この芸者を呼んで楽しめる街を示す言葉ですが、これは正確には、芸者置屋、料亭、待合茶屋の三業種の営業が許可された「三業地」を示す言葉でした。赤坂では、この三業地であった溜池から田町通り、中通り（現みすじ通り）一帯に、花柳界が集中していたのです。

芸者が所属する、いわば芸能プロダクションにあたる場所を、芸者置屋と呼びます。若い芸者の寮も兼ねていた置屋では、芸者としての躰やお茶・踊りの稽古、客に満足

してもらえるもてなしや、座敷の雰囲気作りの方法などが教えられました。

赤坂花柳界が栄えた理由は、この芸者衆に格別の品位があったためだと考えられます。明治末に、赤坂の置屋・春本が力を入れて育て全国的な人気を集めた芸者・万龍の例のように、置屋の優れた教育が赤坂芸者に品位をもたらしとも言われているのです。

置屋を取りまとめ、料亭と置屋の間を取り次いで芸者を派遣したり、芸の稽古を行ったりするところを、見番（または検番と呼んでいました。半玉〔※3〕は、厳しい修業に耐え一人前になると、置屋から見番に登録されて、お座敷に出られるようになります。この時、置屋の女将さんは新人を一軒一軒の料亭へと引き回し、お披露目をしたそうです。

数寄屋造りの料亭には、多くの場合日本庭園が設えてありました。美しい掛け軸や錦絵、骨董品が飾られた中で、粋を極めた日本料理を味わいながら、熟練の芸者の舞踊や邦楽を楽しめる花柳界は、いわば日本文化の集大成の場といってもよいでしょう。



『名所江戸百景』
赤坂桐畑雨中夕けい 二代広重
安政6年（1859）／港郷土資料館所蔵

人気の芸者はお抱えの人力車で料亭を行き来していました。

赤坂で代々酒屋を営むEさんはこう言います。「料亭に芸者が来て、話を合わせてくれる。歌つてといえは歌つてくれ、踊つてといえは踊つてくれる。落ち着いた雰囲気のお酒や食事を楽しめる花柳界の文化は素晴らしいと思います。料金も高級クラブなどに比べたら、安いくらいではないでしょうか。芸に秀でた一流の芸者は、しぐさ、雰囲気、言葉遣いすべてに、伝統的な品格があるのです。」

芸者さんは身近で憧れの人

かつての赤坂には、髪結いさんがたくさんいました。街にいくつもあった銭湯は、何故こんなに客がいるのか不思議なほど、どこも混んでいたのです。銭湯では、座敷に出る前の芸者に出会うこともありました。彼女たちの白のおしろいが湯船に浮いていることも。湯上

この非日常空間を訪れた客たちは、取引先を接待したり、仲間内の宴席を楽しんだり、外国人を案内したり、時には重要な商談を行ったのです。

かつての赤坂・花柳界



明治30年頃、半玉の頃の万龍。後に赤坂花柳界を牽引する存在に。／取材提供写真

戦前には、海軍が新橋の、陸軍が軍施設のある赤坂の料亭をひいきにしていると言われていました。昭和11年、永田町に国会議事堂が出来て政治家や財界人が訪れるようになると、赤坂花柳界はさらに栄えました。飲食のためだけでなく、ここは彼らの仕事の上でも必要な場所となったのです。

かつて赤坂の料亭の女将を務めたCさんは、自身の仕事の心構えや経験を、次のように語ります。「お客様は、誰もが殿様みたいな気分になりたいものです。そんな時、もし嫌な客に会ったりしたら気分が台無しになるので、他のお客様と出会うことなく最高の気分でお帰りいただくようにと心がけていました。

りの芸者が、櫛で日本髪を結びあげて帯を緩めに締めた姿は、非常に美しかったそうです。

料亭の入り口は、お客用と、芸者衆などが使う勝手口に分かれていました。地元の人間にとつて料亭は敷居の高い場所でしたが、配達のために勝手口から入った人は数知れず。ここに並べて置いてある芸者の下駄には、間違えないようにそれぞれ「○子」と白字で名前が刻まれていたのですが、それがどうしても欲しかったという女の子もいました。

青山に住んでいたGさんは、子どもの頃のあるお正月、父親に赤坂の料亭へ連れて行ってもらいました。獅子舞をみたり、芸者さんの膝に抱いてもらったりして、「わあ、何かい匂いがするな」と思ったそうです。

赤坂の小学校に通うなかには、芸者の親を持つ子も珍しくありませんでした。しかし、こうした子たちが差別を受ける事はなかったのです。これは、「花柳界の人を、いつも楽しそうだからといって羨んではいけない。いろいろな事情があるといって蔑んでもいけない」という、親たちの教育があったためかもしれません。

ただ、花柳界の人々はあまり外の人間を受け入れることがないため、一般と花柳界の子どもの交流は少なかったようです。

- ※1 料亭 一般に高級な和食を提供する料理店のこと。通常の店と違い芸者を呼ぶことができますが、格式があるため一見さん（初めての客）だけでは利用できませんでした。
- ※2 待合茶屋 待合、あるいは茶屋とも呼ばれた貸席業。お客さんの求めに応じて、仕出し料理を用意したり芸者を呼びました。
- ※3 半玉 年若い芸者の見習いのこと。関西では舞妓と呼ばれます。

赤坂花柳界の日常の風景

黒板塀が続く、赤坂の料亭街。花柳界の雰囲気には、独特なものがありました。商売が始まる夕方になると料亭の前にそれぞれ水が打たれ、盛り塩が置かれて、あたりは緊張感のある静けさに包まれます。あまりにも綺麗にしてあるので、この時間になると近所の人たちは界限に入ることを躊躇するくらいでした。



復刻版大東京写真案内（協力：博文館新社）

表通りから奥まった路地には、置屋や個人の住宅がありました。置屋からは三味線の稽古の音が流れ、通りには芸者衆を乗せた人力車が走ります。ほんのりとおしろいの匂いが漂う町。これが、かつての赤坂の当たり前の風景だったのです。

花柳界がもつとも忙しくなるのは、大晦日からお正月の三が日にかけてでした。この時期、芸者衆は黒地の江戸褌の紋付に赤い蹴出し※3、稲穂のかんざしで正装して、各料亭へ挨拶回りに行きました。30人くらいの芸者があちらこちらへと行き交い、この時期には、お客さんも料亭から料亭へと回って遊んだそうです。

お寺や神社に対する信心が篤いことも、花柳界の人びとの特徴でした。昔は、円通寺や豊川稲荷東京別院などへ、芸者たちが着物の左褌※4を取って坂を登って、お参りする姿がよく見られたそうです。

花柳界と二人三脚で発展した赤坂

赤坂の花柳界の周辺には、下駄屋、呉服屋、着物の洗い張り屋、足袋屋、判子屋、お菓子屋、染物屋、畳屋、簾屋、八百屋、魚屋、美容院、お風呂屋など、花柳界と関連するさまざまな店が軒を連ねました。赤坂の街全体が花柳界を支え、共存共栄のかたちで

繁栄してきたのです。

こうした店のひとつである質屋は、芸者衆にとつての倉庫代わりでもありました。質屋では、預かった着物を長さ1メートル、高さ10センチくらいの桐箱に入れて、蔵に保管していたのですが、これは芸者さんにとつて、自分で保管するよりも安全な状態だったようです。

つまり冬になると、芸者衆は夏の着物を質屋に持ってきて来て、価値のある着物でも安くいいといて、置いていくのです。そうして夏になると今度は夏の着物を受け出し、冬の着物を持ってきて同じように置いていったそうです。

最高のおもてなしをするために

花柳界には、料理を料亭・待合に納入する専門業者、仕出し屋と呼ばれる商売がありました。仕出し屋は、すべての料理を二度にお座敷に運ぶようなことはしません。時間が経ってしまうと、味が変わってしまうからです。お客の食事の状況を確認しながら、その都度次の料理を用意し、運んでいました。汁物は特別な入れ物で運び、料亭・待合で温めてから出していたようです。それだけ、味に気を遣っていたのです。



- ※3 蹴出し 着物の下につける下着の一種。腰巻きの上につける裾よけ。
※4 左褌 裾を長く着付けた芸者が、左手で右側の裾を持つこと。色を売らずに芸を売る、芸者の誇りの象徴とも言われました。

時代の流れとはいえ、小学校の同級生がこうも違う道を行くものかと…。彼女は赤坂芸者として名を上げ、僕は近々戦地へおもむく。これが70年前の現実だった。お互いに言葉すらかけられずに・・・。

軍隊と二・二六

歴史に残る大事件の舞台になった街

軍施設が置かれた赤坂・青山は、兵隊と縁の深い街でした。有名な二・二六事件が起きた時には、平和な街が一変して厳戒態勢となりました。決起軍として立てこもった兵の中には、暮らしの中で親しんだ人があったことも、人々にとつて忘れられないことでした。

軍隊の街、赤坂青山

赤坂・青山は、軍事施設が多く存在する軍隊の街でした。朝が来ると軍の起床ラッパが街中に響き、軍人たちは街の人から兵隊さんと呼ばれ、身近な存在として親しまれていました。大人ばかりでなく、子どもたちにとつても彼らは憧れの存在。兵隊さんがいてくれたおかげで、赤坂・青山の子どもたちは安心して暮らすことが出来たのです。

軍隊といつても施設によつては、昭和初期まで塀が造られず、住宅地との境は杭と有刺鉄線で仕切られただけのものでした。そのため住人達はみな、上官にしごかれる兵隊さんの姿を見ていました。

「遊びに行つては駄目、入っちゃ駄目だぞ」と大人たちに言われてはいましたが、午後1時と3時の歩哨、つまり警備兵の見回りがいなくなるると、子どもたちは兄弟や近所の友達と、施設の庭から中へ忍び込みました。土手に登ったところを見つかつて、「退却だー」と叫んで逃

げては、また忍びこんで遊んでいたのです。

一般公開の祝賀行事・軍旗祭の日には、施設の中に堂々と入ることが出来ました。この時子どもたちは、兵隊さんと楽しく遊んだものです。兵隊さんたちが機嫌のいい時は、子どもの頭をなでて可愛がつくれました。

兵隊さんたちの里帰りの前日、軍施設の裏の家には、塀越しに「〇〇上等兵」などと名前を書いた風呂敷がポンポンと投げ込まれてきました。それらには、荷物検査で没収されてしまう物が入っていたのです。家で包みを預かつておくと、翌日持ち主の兵隊さんが取りに来ます。気のきいた兵隊さんが、預かつてもらったお礼として家の子どもに「僕、食べなー」と新聞紙にくるんだツ木通りの太鼓焼をくれたので、その子はとても嬉しかったとか。

代々木練兵場での厳しい訓練を終えた兵隊さんたちが近衛第三連隊「地図B2」へ戻る途中、営門を目前に、何人もバタバタと倒れることがありました。そのたびに、近所のお母さんたちが冷蔵庫の水を持つていつて介抱しました。

30分ほど経つと、衛生兵が担架で迎えに来ました。こうした光景を間近で見っていた、当時近所の子もだったAさんは、歩兵になんか絶対にならないと言っていました。

施設近くの商店街には、軍人向け用品、お土産屋や食事処も多く、兵隊さんの存在は街の商いを支えていました。

Kさんの家の蕎麦屋では、酔っ払った兵隊さんがよく大きな声で「週番赤だすき」という歌を歌っていました。それを覚えた父親が家で歌うので、Kさんも覚えてしまったとか。ある日また酔つて歌っている兵隊さんの短い腰刀を、Kさんが1本抜いて遊んでいたら、兵隊さんが気付かないまま帰つてしまい、後から父親が布に包んで謝りに行った事もありました。

赤坂・青山は、こうした軍隊の街である一方で、政治家の住む街でもありました。官邸や国会議事堂が近く、政財界の要人の親類縁者が同級生や近所にいたため、住民にとつては国家の要人もまた身近な存在だったのです。



二・二六事件 赤坂の街中を通る戦車／取材提供写真

【二・二六事件とは】

昭和11年(1936)年の2月26日から29日にかけて、旧日本陸軍の青年将校たちが起こしたクーデター事件。この頃深刻だった第一次世界大戦後の大不況と農村の困窮を打破するために、特権階級である閣僚らを力づくで排除して、天皇中心の政治を行う昭和維新を計画したのです。決起軍のほとんどは歩兵第一・三連隊の兵隊たちで、これに少数の近衛歩兵第三連隊が加わりました。彼らによる襲撃によって、26日の早朝、高橋是清大蔵大臣、斎藤實内大臣、渡辺錠太郎陸軍教育總監らが暗殺されたのです。反乱軍は、一時は山王ホテルと料亭幸楽などに立てこもったものの、28日に昭和天皇から「原隊に帰還せよ」と命令が下されると、一転して反乱軍扱いになりました。29日には青年将校らの中心人物たちの投降・自殺によって事件は収束。投降をうながす説得に応じて、反乱に加わった兵隊たちは原隊に戻りました。

二・二六事件 その時、街の人は…

数日前から前夜まで降り続いた雪が積もって、地面は凍りついていました。昭和11年（1936）2月26日の朝。今よりずっと静かだった赤坂・青山の街に、銃声が響きました。

この日、長靴に入ってしまうほど深い雪の中を、子どもたちは普段通り学校へ行きました。ある子どもは、府立二中（現日比谷高校）へ登校する時には特に呼び止められなかったのに、学校へ着くと何も知らされぬまま、すぐに家に帰されました。赤坂見附から坂の上にかけて、大雪のためか路面電車が3台ほど並んで止まっていました。車も全部雪で止まってしまったので、歩いて家まで帰るしかありませんでした。

この日の朝、決起軍が、高橋是清邸や首相官邸などに向かいました。Hさんの通う女学校が、歩兵第一連隊の見学会に行った時案内係をしてくれた兵隊さんも、この決起軍の中にいたそうです。

やがて事件を鎮圧するための軍隊が、千葉県佐倉の連隊などからやってきて、赤坂周辺に待機し始めました。26日昼過ぎには戦車が何台も家の前に並んで、住民の家の中にまで兵隊が入ってきました。

重大な事態になったため、付近の小学生には全員避難命令が出て、近くの成満寺「地図B-1」左や中之町小、氷川小などへ避難させられ

ました。中には中学生と偽って家に残った子もいたとか。時間が経つにつれ、住民たちも事件のあらましを聞かされるようになりました。高橋は清大蔵大臣は子どもたちに人氣があつたため、殺されたと聞いて残念で仕方がなかったという人もいました。

住民たちは、まさか日本人同士が戦う事になるとは思ってもみませんでした。離れた場所に親類縁者のある人は、昼夜を問わずに避難していました。Jさんは、夜中に母親と渋谷駅まで歩いた後、電車で父親のいる辻堂へ向かいました。退院直後だったTさんは、事件の翌朝毛布に包まれて六本木の親戚の家へ車で避難しました。道中、兵隊が街角ごとに立っていて、何度も「止まれ！」と剣付き銃を突き付けられ、身の危険を感じました。

事件現場に近いツ木通りや赤坂通りには、鉄条網で家を封鎖されて避難できずにとり残された人や、興味本位で残った人、また、家を守るために残った人たちがいました。残った住人たちは首相官邸方面の窓に畳を重ねて立て、雨戸に布団を詰めて、銃弾から家や身を守りました。いつ銃弾が飛んでくるかと恐れて、風呂桶に隠れたりもしました。

そんな中には、戦争ごっこのつもりでいた子どももいたとか。窓の外が怖くて覗けなかった子もいた一方で、バリケードをこっそりくぐって、突撃寸前の緊迫した兵隊さんの

後を付いて回り、見つかつて「帰りなさい」と怒られた子もいました。帰るといっても三分坂「地図B-3」が鉄条網で封鎖されて通れなかったので、兵隊さんに抱えられてバケツリレーのように運ばれて通りました。

大人の中にも、子どもと同じようにバリケードを抜け様子を見に行つた人がいたようです。煙草を持つて山王ホテルへ反乱軍の演説を聞きに行つたり、わざと料亭幸楽「地図B-1」左の近くに本などの配達をした人もいました。

母親が国防婦人会「※1」に所属していたためか、父親が鎮圧部隊の手伝いで呼ばれていた人もいました。鎮圧部隊は、飯盒に詰めたご飯と梅干一つを持つてきただけだったので、住民たちは彼らのために漬物やカレーを提供して、炊き出しをしました。

溜池周辺では、反乱軍と鎮圧部隊が剣付き銃を立てて向かい合っていました。兵隊さんに「銃撃戦になりそうな時は教えてくれ」と頼んでいる大人もいました。

溜池のある酒屋さんはこの時、やってきた決起軍の兵隊さんに、お酒を売りました。事件の後で憲兵に調べられましたが、「お酒を売るのが商売だから、いつもの通りに売りました」と答えたところ、お咎めなしだったそうです。バリケードを抜けて山王下の山王ホテルまで行き、決起軍の兵隊さんにおにぎりを差し入れた人もいました。

事件後すぐに、大尉の父親は事後処理のために上京し、Gさんの父を頼つて来ました。Gさんの父は「来てもらつては困る」とは言つたものの、彼を家に滞在させていたそうです。大事件の中心人物の家族だけに、この時は家中に緊張感が漂っていました。

事件後何年経つても、料亭幸楽で食事をする人は「ここが反乱軍が立てこもつたお店だよ」と話題にしていました。

兵隊さんへの街の想い

二・二六事件の後、日本の軍国主義はますます色濃くなってきました。事件の前には子どもたちを軍旗祭などで可愛がってくれていた兵隊さんが、反乱軍に加わった後、満州へ行くことになったのです。その時には、同級生全員で六本木まで見送りに行きました。

青山では、代々木練兵場で大砲を撃つ音が、ドストドスンと聞こえました。同じ軍隊でも、海軍は優しく陸軍は怖い印象があつたようです。乃木坂あたりの子どもたちは、将校の馬を「お馬が通る、お馬が通る」といつて見に行きました。

東郷神社の隣に出来た日本海軍の記念館・海軍館に行つては、潜水艦の潜望鏡や魚雷、日中戦争で左翼が折れても生還した有名な樫村機の展示を見て、「早く兵隊になりました



※1 国防婦人会 正式には大日本国防婦人会。既婚女性を中心とした軍事援護団体として、昭和7年(1932)年に設立しました。



三分坂上に近衛3連帯があったころ、乃木大將は乃木邸からあの乃木坂を下つてこの三分坂に入った。T氏は子供の頃、將軍のの載つた人力車を押したので、將軍に頭をさすられたのが自慢の一つであった。

※2 野中 四郎 明治36年(1903)～昭和11年(1936)。二・二六事件決起軍の中心人物の一人。歩兵第一連隊中隊長。警視庁を占拠していましたが、決起失敗が明白になった29日に自決しました。

歳時記でたどる春夏秋冬と祭りの伝統

牛車に牽かれ町内を廻る大きな宮神輿、杜にそびえる神楽殿。

赤坂氷川神社を始めとした多くの神社仏閣が建つ赤坂・青山の、なつかしい祭りの風景をたどります。

四月 花祭り

五月 こどもの日
(端午の節句)

八十八夜



7月 虎ノ門の江戸見坂からは、隅田川の花火を眺めることが出来ました。

六月 入梅

七月 七夕

八月 お盆

九月 お月見



昭和11年9月15日
赤坂氷川神社 本社御神輿新調
取材提供写真

四月 花祭り

お釈迦様の誕生日である4月8日には、円通寺と浄土寺で花祭りが行われました。円通寺では説法を聞いた後に、花見堂の釈迦像に甘茶をかけます。その後箱膳に入れたご馳走がふるまわれると、親の代理でお祭りに来た子どもは、大人に混じってドキドキしながら食べました。

六月 赤坂の山王さん

毎年6月15日に、山王日枝神社では例祭の山王祭が行われます。かつては、この日参詣客向けの見世物小屋が出ていたそうです。赤坂で子ども時代を過ごした人は語ります。「六尺(約180センチ)の大きな板に血を塗って『六尺の大イタチ』だなんて、ふざけた見世物小屋がいつばいあって、おもしろくてね。本当は当時の麹町区(現千代田区)の神社だけど、やっぱりあそこは『赤坂の山王さん』と呼んでたね!」

九月 青山熊野神社のお祭り

9月21日は青山熊野神社の例大祭です。この祭礼には青山や原宿(現神宮前)の各町内から神輿が集まり、華やかな雰囲気でした。

九月 赤坂氷川神社の例大祭

赤坂氷川神社のお祭りについて、赤坂育ちのKさんは語ります。「各町内には、お祭りの神輿行列に使う毛槍が二本くらいずつありました。中でも二ツ木町の紫色の長い毛槍は、振るのが難しかった。自分ともう一人の友達だけが、行列が花街に入る時、この長い毛槍を振ることを許されていたんです」田町、新町には、田四五(田町四丁目と五丁目)をまとめた呼称(「地図B2右」)の神輿が出ました。



赤坂の氷川神社の本祭りは大変な賑わい。
槍を握る手に豆ができるので、手拭を巻いてから振りました。

十月

十一月 七五三

十二月 大晦日

一月 元旦

二月 節分

初午

三月 ひな祭り(桃の節句)

お彼岸



フンドシひとつで火事場へ飛び込むところから「勇み連」と言われた仲間たちが、大あばれしながらボロボロの万灯を振り回してやってくる。「鳶」ともいわれる、威勢のいい兄さんたちだった。



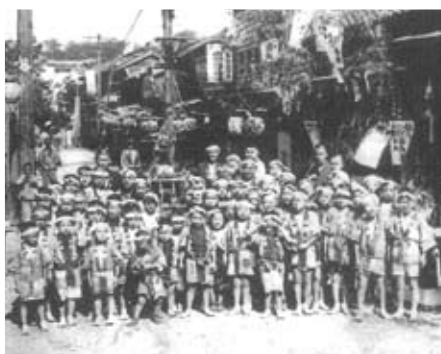
『諸国名所百景』
東都青山百人町 星灯篭
二代広重 文久元年(1861)
港郷土資料館所蔵

十月 円通寺の秋の御会式

10月なかば、日蓮上人命日に行われる御会式。この日は火消しの纏や平打ち用の太鼓、そして万灯を持つ人々が都内各所から集まり、大田区の池上本門寺へ向けて、賑やかな行列が発しました。紙の造花を飾った中に提灯をたくさん並べた万灯は、とても綺麗なものでした。子どもたちは、竹を上下に振り、「どんつくどんどん」と鳴る団扇太鼓を叩く行列の後につきながら、その美しさに見とれたものです。

十二月 西教寺のクリスマス

学習塾が開かれていた⑫P参照西教寺では、クリスマス時期になると、お堂でおとぎばなしを聞かせたり、踊りを見せたり、お菓子をくれたりしました。これが、子どもたちの楽しみでした。



昭和2年 赤坂氷川神社祭り／取材提供写真

十二月 赤坂氷川神社の大祓

大晦日には、大祓のために赤坂氷川神社へ。紙の人形に家族全員の名前と年齢を書き、新米を入れた奉納金と玉串を添え納めて、一年の穢れを払い新年を迎えるためのお清めをします。元旦には、新年を祝う歳旦祭に参拝しました。



暮れになると、鳶の頭が、家々にお正月の飾りを付けるため街を回りました。

二月 豊川稲荷東京別院の豆まき

元赤坂の豊川稲荷東京別院で行なわれた節分のお祭りは、とても賑やかでした。

赤坂氷川神社 蘇る祭りの風景

数あるお祭りの思い出の中でも、とりわけ頻繁に登場するのが、赤坂氷川神社のお祭りの話です。

この宮神輿はとても大きなものでした。当初は神主さんたちが担いでいたものの、大きすぎてたびたび落とすので、そのうち美しく飾られた6頭ほどの牛が牽くようになったとか。通常、神輿は2尺から2尺半（約75センチ）ほどの大きさですが、この宮神輿は5尺（約1.5メートル）もありました。牛車に牽かれた宮御輿が氏子の町を練り歩く姿や、都電の線路の上を祭の行列が堂々と進む光景はとても雄大で、多くの人が赤坂氷川神



「赤坂小学校早起会」赤坂氷川神社境内での、赤坂小学校早起会の集合写真。子どもたちの後ろに見えているのは、戦時中まで建っていた神楽殿の屋根です。現在のお祭りでは、ここに盆踊りの櫓が組まれています。境内には、神楽殿の礎になった石の遺構が今も残されています。／取材提供写真

社のお祭りを楽しみにしていました。宮神輿の渡御巡行は、葵町「地図C」中央ま

でを廻っていました。

「大きな宮神輿は、指又で電線がかからないように上げながら町を渡御して



赤坂手古舞連／取材提供写真

いました。金棒、毛槍、山車、神輿、子ども神輿が、祭り行列の順番。当時の赤坂にあった21の町会それぞれから、神輿、子ども神輿、山車のどれかが出たから、お祭りの行列は40台以上の規模になる。全部並ぶと、それは壮大なものでしたよ。」

芸者衆が男装して踊る手古舞連も、行列に加わります。普段あまり見る機会のないもので、とても華やかでした。

赤坂では、商人も勤人も軍人も、大人も子どもも分け隔てなくお祭りを楽しみました。牛車が牽く赤坂氷川神社の宮神輿渡御の巡行は、赤坂の街を繋ぐ一大イベントでしたが、昭和15年（1940）を境に、宮神輿は出なくなっていました。

大正末期の赤坂氷川神社神輿渡御順路図 赤坂氷川神社提供



牛車が牽く宮神輿／取材提供写真

外国文化

いち早く入ってきた外国風の生活文化

赤坂には、商店街に並ぶ商家と高台のお屋敷が混在していました。同じくお屋敷が多かった青山には、洋館もありました。アメリカやカナダ、ブラジルなどの大使館があつた赤坂・青山は、昔から外国文化が身近に感じられる街だったようです。

オペラを楽しめた日々

大正5～7年（1916～1918）にかけての赤坂には、イタリア人の振付師・演出家ローシーの経営する本格的なオペラ劇場、ローヤル館「地図B」上がありました。ローシーは日本でのオペラ指導のために、イタリアから帝国劇場へ招聘されて来た人物です。帝国劇場でのオペラ興行が中止になった後、彼は自らの資産を投じて、赤坂見附、つまり現在の元赤坂にローヤル館を造りました。

ローシーや、彼と一緒にローヤル館を始めた原信子、田谷力三などのオペラ歌手たちは赤坂に住み、オペラの普及に努めました。しかし本格的なオペラは当時の日本の音楽環境には少し早すぎたのか、長続きすることはありませんでした。ローヤル館はたった2年で、閉館となってしまったのです。

この期間、近所に住む人々はチケットをもらい、オペラを楽しんだとか。Mさんのお父

さんはオペラが好きで、地域の新聞に批評を書いていたそうです。Aさんの家では、「親しくしていたオペラ歌手が家に来て歌ったことがありました。その時は障子がビリビリと震えた」といいます。

その後、赤坂から発信された日本のオペラ文化は、浅草で和製歌劇「浅草オペラ」として全盛期を迎えます。その基盤を支えているのは、ローヤル館で活躍した歌手たちでした。

ダンスやスケートを楽しんだ若者たち

昭和4年（1929）に溜池に出来たダンスホールフロリダ「地図C」上も、赤坂の外国文化を象徴するものの一つです。関東大震災以後に、若者たちが夢中になりました。こは当時流行し始めた、アメリカンジャズの生バンドの演奏に合わせて踊るスタイルで、当時は「生バンドの入ったホールは珍しかった」

た」といいます。

やがてフロリダは、ディック・ミネ、淡谷のり子などの有名歌手やジャズ演奏家を輩出し、日本のジャズのリーダー的存在となりました。外国人歌手や、チャップリンも訪れたとか。大正一桁生まれの人たちは、ちょうど青春真っ盛りにダンスブームを迎えたため、毎日でも通ったそうです。

しかし、戦争の足音が近づいた昭和14年（1939）に、「敵性音楽で享樂的である」との理由で、フロリダは閉鎖されることになりました。わずか10年間で終わってしまったダンスブームでしたが、戦争前の東の間の平和な時代だったといえます。

昭和7年（1932）には、西洋式ホテルの山王ホテル「地図B」左が開業しました。この地下には、当時日本では珍しかったアイススケート場がありました。全日本フィギュアスケート選手権が、ここで開かれたこともあり、オリンピック選手稲田悦子の練習場

でもあったので、子どもたちは同じリンクの上で滑っていたそうです。大学生のアイスホッケーの練習も行われていたとか。戦後、この山王ホテルはGHQに接収されて、アメリカ人将校の宿舎となりました。



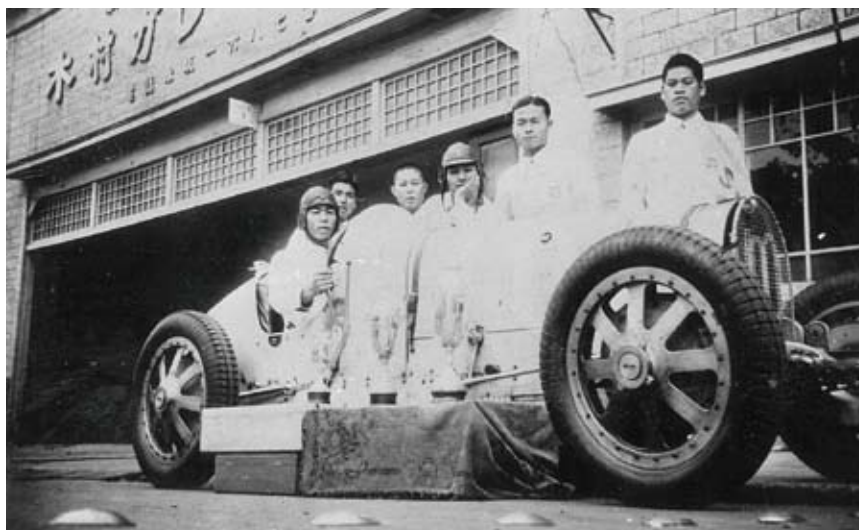
チャイナ服に毛皮のハーフコートでス〜イス〜イ。後でわかったけど、あの人は満映スターの李香蘭【※1】だったと聞いた。

日常生活にも外国文化の影が

赤坂二丁目のアメリカ大使館近辺には、他の場所に比べ多くの外国人が住んでいました。特に桜坂の上に多かったので、この近くに美容院が出来ると大使館付きの奥さんや華族の方が出入りし、いつも黒塗りの車が店の前に止まっていた、という話が残っています。

帽子屋さんと外国文化との触れ合い

南青山で帽子屋を営むMさんは、昭和15年（1940）当時銀座の帽子店で働きながら、S高校夜間部で、ずっと英語を勉強していたそ



昭和9年 赤坂の外堀通り近くにあった木村ガレージ前にてレースの優勝記念撮影／取材提供写真

さらには西洋風のパン屋が2軒あるといったように、このあたりでは外国人向けの商売が成り立っていました。レタス、キャベツ、セロリなどの西洋野菜を専門に売っている八百屋さんもありました。赤坂・青山地区にはお屋敷も多かったので、スパゲティ、マカロニ、かに缶やコンビーフなど、洋風の高い食品がずいぶん売れたといえます。

「今のカリフラワーは、食用となる白い花の部分だけを入荷しますが、戦時中は、葉っぱまでみな全部食べました」とは、赤坂の八百屋さんの話です。また夏場にはセロリやカリフラワーなどの西洋野菜を、軽井沢の方へ持って行って売っていたそうです。外国人の避暑地でも、こうした西洋野菜が売れたのでしょうか。戦後に料理番組がテレビ放送されるようになってから、日本でも西洋野菜が普及するようになりましたが、それまでほとんどの一般家庭では、西洋野菜は使われていなかったといえます。

身近なところで外国文化に触れる
昔の赤坂はあちこちに教会があつたようです。「牧師さんや外国人の方にすぐ可愛がられた思い出がいっぱい。賛美歌もおぼえた」とか。霊南坂教会にはパイプオルガンがあり、その奏者は「椰子の実」の作曲で有名な大中寅二でした。その彼の息子である大中恵は氷川小に通い、戦後に童謡「サツちゃん」や「おなかのへる歌」などを作曲しています。氷川小で恵と同級だった大正12年生まれのTさんは、「横浜から氷川小に越して来たら、氷川の子どもたちは皆音符が読めたのでビックリした」そうです。

※1 李香蘭 大正9年(1920)～。中国撫順市生まれ。戦前の中・日・香港などで映画女優として活躍。戦後は本名の山口淑子名で活動し、参議院議員も務めました。



昭和16年 霊南坂基督教会／赤坂区史 港区立港郷土資料館所蔵

うです。英会話の先生はアメリカ人でした。第二次世界大戦が始まると先生の帰国が決まりましたが、敵国人であることから、夜はいつもMさんが宿舍まで送って行きました。その時に皆から「おまえ、こんなことやつていたら憲兵に捕まっちゃうよ」と言われて怖くなったこともありました。

教会のアメリカ人牧師に英語を教えてもらったことも。しかしレッスンを始めて二年ほど経ったある日、指定された日に教会に行くと、祭壇の方に行きなさいと言われたのです。どうも変だと思っていたら、知らぬ間に洗礼を受ける運びになっていたとか。Mさんは驚いて帰ってきてしまい、それきりレッスンには行けなくなりました。

戦後、Mさんは代々木のワシントンハイツ（在日米軍住宅）前にあった、婦人服やドレスのオーダーを受けるドレスメーカーに勤務しました。とても繁盛していたそうです。ある日、外国人の客が「残り布で一緒に帽子を作りたい」というので、サンプルを作つてあげることにになり、それがきっかけとなって、婦人帽子を作る道に進むことになりました。

やがてMさんは南青山にお店を開き、ワシントンハイツの米軍将校の奥様方を中心に、米軍キャンプやイギリス大使館などから、多くの注文を受けることができるようになりました。昔英語を勉強していた経験が、こ

で活かされました。麻布台にあった東京アメリカンクラブで婦人帽子のショーを開催したこともあるMさんは、今でもその時に作った帽子の写真を大事に保管しています。

走る自動車は外車ばかり

戦前、自動車関連の店がたくさんあった赤坂の外堀通りは、全米一の自動車工業都市として1950年代まで発展した都市になぞらえて、「日本のデトロイト」とも呼ばれていました。当時の自動車といえば、高級外車ばかりだったのです。

道沿いには外車を売る店や、所有する2、3台の車を使ったハイヤー・タクシー業の店、自動車の部品を売っている店もあれば、運手だけを貸し出す会社など、さまざまな業種がありました。

戦前のラムネ製造会社の社長さんは、「大八車で坂を上ってラムネを配達している時、車でパッと追い越されていくのがくやしいから、T型フォードを買った」そうです。赤坂に外車関連の商売が多かったことから、戦後も外国人が集まってきたため、近くに高級ナイトクラブのニューラテンクオーター「地図B1左近」やコパカバーナ「地図B1左近」が出来たのだとも言われています。

和洋の楽しみが混在した街

大正時代から昭和にかけて、賑やかな街へと変わっていった赤坂・青山。流行の移り変わりに合わせて、劇場、映画館、ダンスホールが建ち並んだこの街では、ハイカラな洋風娯楽と、なじみ深い日本的な娯楽のどちらもが愛されていました。

洋風娯楽が花開いた日々

大正5年（1916）にできたオペラ劇場ローヤル館では、「椿姫」や「天国と地獄」など、本格的なオペラの曲目が上演されていたそうです。

ダンスホールフロリダの二階には、ローラースケート場がありました。しかし、子どもたちは有料のローラースケート場より、滑ることを禁止されていた神宮前や絵画館前で遊ぶことが多く、よく叱られていたといします。それでも、靴の下に金具を付けたローラースケートを履いて夢中になっていたのです。

街にはビリヤード場もありました。ここでは料亭帰りの人が多く遊んでいたといします。一ツ木通りにはカフェやミルクホール「※1」がありました。当時のカフェは今とは違い、女性がお客さんを接待するような場所、子どもは近づきにくい場所でした。

延ばして映画を楽しみました。

昭和10年（1935）前後にはトーキー映画が主流となり、スクリーンから音声流れるようになりました。当時の映画フィルムは本数が少なかったのか、一本終わると、映画館の従業員が次の映画館に自転車でフィルムを運んでいました。これが上映時間に届かず、客が待たされたこともあったそうです。

日本の大衆演劇を楽しむ

演技座は、明治時代に福祿座という名で始まった小劇場です。ここでは壮士芝居「※2」や、それが発展した新派、歌舞伎などの演目がかかり、溜池や山王日枝神社を訪れる人びとを主な客としていました。

しかし、この劇場は関東大震災で焼失してしまいます。震災翌年の大正13年（1924）には再建され、新国劇「※3」を通常で上演する小屋としての再出発を果たしましたが、これも再び翌年の上演中に出火、焼失してしまいました。

新国劇の中心役者だった辰巳柳太郎や島田正吾らは赤坂に住んでいた、近所の人々は切符を買って、彼らを応援していたといします。

演技座が焼けた跡には、その後何も建たなかった、野球や陣取りなどのさまざま

胸をときめかせた活動写真

ローヤル館はその後、帝国館と名前を変えて、邦画の映画館となりました。ほかに、青山には映画館の青山館「地図B6下」がありました。当初上映されていた無声映画は、画面の脇で弁士が映画の内容や台詞を語る形式のもので、時にはバイオリンなどの演奏が入ることもあったといします。

映画では「鞍馬天狗」「忠臣蔵」などが、役者では林長二郎や坂東妻三郎などが人気だったとか。週代わりで上映作品が変わるのを、女性や子どもたちは楽しみにしていたそうです。

関東大震災の後には、赤坂溜池に洋画専門の映画館、葵館が作られました。ここでは外国の無声映画の上映が中心で、専属弁士を務めた徳川夢声の名調子（めいちょうし）が人気を博したといします。子どもから大人までが、「キングコング」や「ターザン」、「ゆりかごの唄」、

な遊びが出来る、子どもたちの恰好の広場となりました。夏にはここで、芸者さんの指導による盆踊りが行われました。

また、一ツ木通りの路地を入ったところには寄席の小屋もありました。入り口のところには旗が立っていて、落語のほか、時には芝居もかかる小さな大衆劇場だったそうです。冬は寒いので、お客さんは火鉢にまたがったまま芝居や落語や浪曲を聞いていたとか。観に来ているおばさんたちは、10銭玉や50銭玉を紙に包んで「おひねり」といつてポイと投げるのを、楽しみにしていました。

西洋音楽と日本音楽の交差点

青山のお屋敷町には、ピアノやオルガンのある家が少なくなく、そうした家庭の子どもは、幼いころから西洋の音楽に親しみました。ある子がピアノのお稽古をしていると、曲名を教えて欲しいと人が訪ねて来たこともあったとか。

洋楽を楽しんだのは子どもたちばかりではありません。青山には、日比谷公会堂での新交響楽団（NHK交響楽団の前身）の公演や、神宮前の日本青年館「地図A5中央」で催されるオーケストラを聞きに行く人も少なくありませんでした。

戦時中のある演奏会では、楽団員も鉄兜



大正13年頃 葵館 外壁装飾／田中純一郎氏提供 港区立港郷土資料館所蔵

チャップリンの「黄金狂時代」などを楽しんだそうです。

「戦前はアメリカの西部劇やポパイなどの映画も観ることができ、楽しい時代でした」とIさん。子どもたちは映画館の裏口から入ってタダ見をするか、「今半」といつて、映画が一本終わると入場料が「今から半額」となるのを待つて入ったとか。

その頃の大人にも、子どもたちにとつても、娯楽といえは映画が大きな位置を占めていました。元気な子どもたちは、六本木の麻布日活館、四谷日活館などまで足をかぶり、国民服を着て演奏したそうです。約1時間の演奏中に空襲警報が発令されると、防空壕にワツと逃げ込み、1時間以内に警報が解除されると、再演奏。解除されないまま1時間が過ぎると、再演なしということもありました。曲目は、ベートーベンばかりでした。

一方で、青山では琴などの和楽器の需要も高く、専門店が繁盛したそうです。赤坂には、木造三階建ての三味線学校がありました。

おめかししての歌舞伎見物

赤坂に三代目中村時蔵や二代目市川猿之助などの有名な歌舞伎役者が住んでいたこともあつてか、住人たちは歌舞伎にも、大きな興味を持っていました。

商店を営んでいたKさんの家の近くには時蔵が住んでいて、本人が時々店に買い物に来ては、女性たちを喜ばせました。「時蔵さんが出る歌舞伎の切符を買い、歌舞伎座に出かけるのが楽しみだった」とか。「その時はいちばんいい着物を着て、精一杯おめかしをして出かけたの」と、楽しそうに語るKさん。少し足を伸ばせばすぐ銀座という地の利も、赤坂・青山の人々の娯楽を多様なものにしていました。

※1 ミルクホール 明治末から昭和初期にかけ流行した、牛乳やパンを出す軽食店。
 ※2 壮士芝居 明治中期に起こった自由民権運動を広めるための演劇。
 ※3 新国劇 歌舞伎（旧派）や、新派に対抗して生まれた演劇の一派。新劇と新派との中間的立場。

ふるさとを遠く離れた子どもたちの共同生活

第二次世界大戦のさなかには、たびたび空襲を受ける都市から子どもたちを地方へと移す学童集団疎開が行われました。赤坂区沼津戦時疎開学園は、これが全国的に実施される数カ月前に先駆けて行われた、テストケースとしての疎開でした。

テストケース

昭和19年（1944）5月15日、赤坂区の小学校3～5年生が、静岡県沼津市を目指しました。赤坂区の小学校から男女120名が、昭和20年（1945）6月30日まで親元を離れ、赤坂区沼津戦時疎開学園で集団生活を送るため旅立ったのです。これは同年8月から全国規模で実施された、学童集団疎開に先駆けたテストケースでした。

子どもが疎開に行くかどうかはそれぞれの家の任意だったため、費用はすべて各家庭が負担しました。そのため相当な金額がかかりましたが、8月以降の費用は月10円と、安くなったようです。

参加メンバーのSさんは、「おそらく日本中の集団疎開の中で、一番恵まれていた疎開じゃないか」と語ります。この時の施設は、赤坂区沼津臨海学園（P8参照）という、設備の整ったところでした。気候のよさと食糧の豊富さに加え、児童育成に情熱を燃やす先

生や寮母さんがいてくれたおかげで、地元とも非常に密接な関係を築けたことを、Sさんはその理由として挙げています。

沼津戦時疎開学園の教育環境

親元を離れて、それぞれに割り振られた寮で起床から就寝までを共にする、子どもたちの団体生活が始まりました。家庭的な雰囲気づくりを目指したこの学園では、先生が子どもたちを名前と呼んでいました。これを「親子兄弟みたいだった」と懐かしむ声も残っています。

疎開学園では、一階の20畳の間に、学年を縦割りにした6寮に分かれて暮らしました。赤坂と青山の子どもたちが同じ釜の飯を食べ、枕を並べて眠る以上、「宵越しの、つまり区域どうしのケンカはしない」というルールがあったようです。当時赤坂小4年生だったKさんは、「疎開前に赤坂小に通っていた頃、4人の兄ちゃんたちからは、『青山二丁目から

向こうには行くな！帰ってこれなくなるぞ。青山の連中がこつちへ来たときには帰すな』と教育を受けておりました（笑）」と、当時の様子を懐かしそうに振り返ります。昼寝の時間に寝つけない子のために、先生たちはシヨパンやラベルなどのクラシック音楽を流したり、本を朗読してくれたとか。『三銃士』『ベニスの商人』『明智小五郎シリーズ』から、怪談、戦争スパイ小説まで、いろいろなクエストにに応じてくれました。子どもたちは、眠ったフリをして聞き入ったといいます。

工作と理科の科目は先生が学園内にいなかったため、地元の小学校まで実習に行っていました。この小学校で開かれた合同運動会には、学園から選りすぐった選手が参加しました。徒競走で一番をとったら、寮母さんが泣いて喜んでくれたそうです。高名な書道家を招いて習字を習っていたことも、学園の教育環境の豊かさを知る手立ての一つと思われま



1944年5月15日赤坂・青山・青南・氷川・乃木坂国民学校3・4・5年生120名。沼津にある赤坂臨海学園に、遠足の気分で疎開。なんでかあちゃん泣くの？

遠泳をこなす小学生スイマーたち

疎開学園の生活の特徴付けたことのひとつに、海洋訓練があります。沼津の海に三カ月ほど採まれるうちに、3000メートルの遠泳を泳ぎきる一級の小学生スイマーたちが次々と誕生したのです。疎開当初は10メートル泳ぐのが精一杯だった少年が、1000メートルの検定に挑戦して、見事合格したこともありま

学園では、泳げない子どもの腰にガラスの浮きを付けた

肝試しと慰問団と映画

親元を離れていた子どもたちのために、先生たちはしばしば催し物を企画してくれました。特に印象的だったのが肝試し会です。怪談話をたくさん聞いた後に、お化けの扮装をした先生が隠れる海岸まで行かなくてはならないのですが、これが本当に怖かったとい

まう子もいました。学園にはよく「冒険王」という慰問団が

やつて来ました。子どもたちはこれを大いに歓迎し、「大きくなって立派な軍人となり、恩返しをしよう」と日記に記しています。

時には、街の映画館へ映画を見に行くこともありました。国威を高める『日本ニュース』などの上映を見ては、「ぼくらも一生懸命やつて、今の敵、鬼畜米英を早くたたきつぶしてしまおう」と思ったそうです。この時の子どもたちには、既に敗色の濃かった当時の日本の戦況など、知るよしもなかったのです。

視察・取材・面会

学童疎開のテストケースとしての沼津疎開学園には全国からの注目が集まり、取材や教育関係者の見学が絶えませんでした。

学校ごとに毎月決められていた面会日には、これに合わせ苦労して列車の切符を手に入れた親兄弟や、時にはその代わりの近所の人

が、学園までやつて来ることもありま

鍛えられる日本刀のようになれ」と送りました。この一節が新聞で紹介されると、この母のもとや、疎開学園にいる子へ宛てた激励の手紙が山のように届いたとい



面会でかーちゃんが出した饅頭、俺は食わねえ。かーちゃん泣かしてごめんね。

再疎開で一般疎開と合流

戦況がさらに悪化して沼津も危険になったため、昭和20年（1945）6月に疎開学園の子どもたちは府中へと再疎開しました。その前年8月から既に集団疎開していた、他の児童たちの仲間入りをしたので

食糧が比較的豊かだった沼津戦時疎開学園と違い、乏しい配給だけで賄われていた一般疎開で子どもたちは栄養失調になり、ノミや蚊に食われたところが、かきむしるとすぐ膿んでしまうほどでした。動く

卒業生が語る青山小の疎開

青山小の6年生男子と3年生は、北多摩

郡清瀬村（現清瀬市）に疎開することになりました。昭和19年8月に、6年生と3年生の80人程が西武線清瀬駅に到着しました。3年生男子34名の学寮となった全龍寺では、本堂の左右の座敷がすべての生活の場になりました。朝は布団をたたんで積み上げ、食事と学習の時は長机を出し、夜は布団を並べて寝ました。

疎開当初のまだ暖かい季節には、先生に引率されて、寺から1キロほど離れた清瀬国民学校へ通いました。教室を借りて短時間の授業を受けましたが、この学校の先生や児童との交流は一切ありません。帰りは、近くの柳瀬川で水浴びを楽しんだこともありました。

食事は一日3回。大豆がたくさん入った



昭和20年頃の清瀬 柳瀬川／取材提供写真



学園日誌／取材提供

ご飯を軽く一杯、寮母さんが鉢から自分の碗に盛り、ポンと子どもの器に移してくれるのですが、この量ではひもじさを満たしてられません。畑からサツマイモを盗んできては、生のまま食べました。

ある日寺の庭にあった大きなモクレンの木の実の種を、誰かが割って食べてみたことがありました。皆真似をして二斉に食べましたが、マカダミアナッツのような味でした。夜に子ども全員が大変な下痢を起こして大騒ぎになったところ、お医者さんがヒマシ油を投与してくれたおかげで、幸いにも翌日には回復しました。

寺での生活が続くうちに、気の強いガキ大将が取り巻きと一緒に、他の子どもを支配するようにになりました。ガキ大将は他の子から一口ずつご飯を召し上げ、畑からイモを盗むと真つ先に中を食べました。火鉢を自分と取り巻きのみで占拠したり、自分たちが必ず一番に布団を上げて、よい子ぶりを寮母に見せるなどの身勝手な行動に対し、周りの子は四六時中我慢しなければならませんでした。

昭和20年（1945）の5月26日。子どもたちは先生から、青山が焼野原になったことを知らされました。

街が、人々が、すべてが焼き尽された日

終戦の約三カ月前にあたる昭和20年5月25日、赤坂・青山を含む山の手と呼ばれた東京の広い範囲が米軍の激しい空襲にさらされました。山の手大空襲と呼ばれるこの攻撃は、これより以前の東京大空襲に次ぐほどの莫大な、むごたらしい被害をもたらしたのです。

逃げおせて

赤坂で空襲に遭ったNさんのお話です。「母をまず早く逃がし、私は、白風呂敷に包んでおいた父の位牌と兄たちの靴をバケツに入れ、布団を被って自転車（これは途中で捨てた）に乗って逃げました。赤坂見附に火が襲って来たので、救助を求めて千代田区平河町の方へと走り、途中の坂で用水桶を見つけて頭から水をかぶったのですが、すぐ布団が乾燥しました。永田町の方が近いと判断して逃げる先を変更し、防毒マスクが苦しかったので、口だけずらして着けていました。とにかく必死で、前だけを見て走り、水槽があれば水をかぶって、また逃げました。永田町小学校に着くと、人が大勢いました。みんなプールの水をガラスに掛けて、学校は残りました。翌朝、母とツ木通りで再会出来ました。」

赤坂生まれ、赤坂育ちのIさんはこう語

ります。「火事になったら、もう防ぎようがなかったのです。こっちから火が来ているから、火が少ないあつちへ逃げて、といった具合に……。三井財閥の屋敷の丘の下に、強制疎開（52P参照）の跡地の土が、斜めに盛り上がって立っていました。隠れる場所はこししか無く、自転車を倒し、体を伏せました。先に避難した人の所に火の粉が飛びましたが、消すことは出来ませんでした。ここを動かなければ何とかしのげる。そういう経験を何時間も耐えて、早く朝が来ないかなと、それだけです。翌朝、広い道路の幅が半分くらいになっていました。」

青山で空襲に遭ったTさんは、「青山通りは焼夷弾の雨でした。地面に触れると炸裂し、一面に火の海になります。火災が起きると猛烈な風が起こり、母と弟と青山墓地に逃げるのがやっとでした。墓地の入口に辿り着いた目前に、大きな二階屋が真つ赤に燃えて崩れ落ちました。」と語ります。

赤坂見附の猛火流

「振り返ってみたら、炎が道の両側から中心に向かつて、地面を横に這ってるんだ。なんたつてすごい熱だね。きつと地面の近くの空気が上に上がって、真空状態になっていたんだね。地を這う炎の勢いときたら、すごかった。」

山王下の方からの火流に、青山通りを下る火流が加わって、外堀にかかる弁慶橋の欄干までもを焼き、平河町への坂の桜並木の枝は火の花になりました。弁慶堀に飛び込んだ人の多くは亡くなり、閑院宮のコンクリ塀を乗り越えられずに亡くなった人も、多数ありました。

青山通りを突つ切れなかった人たちは、地下鉄赤坂見附駅のシャッターにへばり付いたまま、崩れ重なっていました。早くに駅舎に入れた人も、二度と出て来ることが出来ませんでした。三角地の防空壕では、入口が風下側だった人が命拾いをしました。



空襲後の赤坂の様子／赤坂区史

【山の手大空襲と赤坂区の被害】

昭和20年（1945）5月25日夜の、中野・四ッ谷・牛込・淀橋・麹町、そして赤坂方面を含む東京山の手への大空襲は、比較的逃げ場の多い地域だったにも関わらず、犠牲者数では東京が受けた空襲中の2番目と言われるほどの大きな被害をもたらしました。この日の赤坂区の死者数は552名（ちなみに芝区131名、麻布区69名）、同年5月27日の残存戸数はわずかに220戸ほどでした。（参考：港区史下巻）



先生がお化けの肝試し、コワカッタ。



みんなで仲良く輪になって入浴。



漁師のおじさんが漁具を使って泳ぎの特訓。

赤坂国民学校焼亡

【故本間馨さん手記より抜粋】

略

最初に、赤坂小に落下したのは、大きな焼夷弾だった。校庭の真中に落ちて燃え始めた。その時の爆風で、校庭に面した窓ガラスは全部割れて飛散した。僕は、その時、校舎内を巡視中だったので、幸い怪我は無かった。鉄兜をかぶり、明日疎開地へ持参する先生の給与、その他のものをリュックにいてて背負っていた。

中略1

更に、二階、裁縫室の方で大きな音がしたので、階段の中央まで来た。その時である。窓から見える空に、黒い塊が落ちてくるのが見えた。その塊が地上数百メートルの処で空中分解した。その一発が窓から階段に落ちてきた。バーンという音で、僕は階段を二、三段すべりおちた。幸い直撃を受けなかったのよかった。火を吹き出したので廊下にあった防火用水をかけて消止めた。

そして、二階の裁縫室へ急いだ。焼夷弾は屋根瓦を突き抜け、裁縫室の天井を貫き、下の理科室の天井裏で燃え出した。もう、僕の手におえないと判断した。急いで、階段をおりて校庭に出た。そして校舎内外の様子から、これ以上、校内に留まるのは危険と判断

し、校舎外に避難することに決心した。

僕は、表通りに出ようと思い、玄関まで来たら、用務員室が延焼中で、正門を通ることができなかった。仕方なく、裏門から出ようと思い、校庭に引き返した。

その頃、熱風で気温が昇り身体が熱くなり異常を感じた。頭の鉄兜を取り校庭の池の水を洋服の上から二、三杯かぶった。その時、池の近くに作った防空壕の蓋に、土を掛けてないのに気付いた。これはいけないと思って、用意してあった土を夢中でかけた。

青山の外苑に行こうと歩き出した。

中略2

どれだけ経つだろうか？僕は、歩き出した。学校を見たかったからだ。紀伊国坂を静かに降りていった。考える気力も無かったが、ふと、我が校舎―赤坂小を見た。赤坂の中腹に、一段と高く聳えていた木造校舎の姿は二寸の形跡も無く消失し、土留の赤レンガがいやに、目に着いた。

（以下は本文からの要約）

時間が経ち、校庭の熱気も大分収まった様なので、一歩一歩静かに入って行き、先ず最初に防空壕を調べた。昨夜避難の時夢中で土をかけたが、木蓋は焼けなかった。

学校創立（明治六年）以来の書類や写真、他の貴重品を含め、すべて無事だった。

列車に乗る準備のための、生き抜くための我慢と考えながら、避難所に泊っていました。

立ち上がり

すでに疎開していた人たちと違って、空襲で焼け出された人びとは、すべてにおいて待った無しといえる、切羽詰まった状態でした。子だくさんの人や事情を抱えた家庭は、無遠慮の極みと承知しながらも、避難先へと突っ込んで行くほかありませんでした。

赤坂・青山には何代にもわたる居住者が多く、こんな時に厄介になれる田舎を持つ人は少数でした。それでも多くの人たちが、なんらかの縁にすがりついて、とりあえずの間の、中にはわずか数日の寝起きの場を求めて、満員列車に乗っていったのです。

当時の地方では、復員者などが増えた戦後と違って人手不足でした。また、寒い季節ではなかったことも幸いしました。罹災者への同情もあつて、寝起きの場の提供だけなら、人づての頼みでも何とか叶えられたのです。

しかし雑魚寝のためのふとん類の準備は、たいていが当面の、または寒くなるまでの借用から始まりました。鍋、釜など貴重な金属の品や、その他の生活用品を整える必要もありましたが、まずは食べ物を入手しなくてはなりません。これらを、一つ一つ努力

表参道の地獄

表参道交差点「地図B6中央」にあった銀行は、初めのうちは避難者を受け入れていましたが、店内に煙が入って来るようになると、入口のシャッターを完全に閉めました。中に入れた人によれば「だんだん息苦しくなつて来て、もうだめかと思った……」とのこと。通りから少し引込んでいた外の銀行入口の前には、後から逃げて来た人々の群れが来ていました。

そこへ、青山北町六丁目交差点「地図B6下」の方から猛烈な火流が押し寄せ、それに炙られるように、さらにたくさんの人が逃げて来ました。しかし、折からの参道並木の下を走つて来た火流に遮られて、秋葉神社「地図B6中央側」と突っ切ることが出来ません。ぶつかって渦を巻き上げる猛火の下、銀行のシャッター口へすがり付く人たちは、上へ上へと山を築きながら亡くなっていました。

翌朝早くに、軍隊が「山」になっていた人々だけを、トラックに積んで運び去りましたが、他の場所では、数日間そのままに置かれた人々たちもいました。

平成19年（2007）、港区はこの地に「和のぞむ」と彫つた円柱状の「山の手空襲」追悼碑を建てました。



空襲で焼けた車／取材提供写真

して求めていくしかありませんでした。

近親宅に落ち着けた恵まれた家庭でも、我慢が出来ない子ども同士が衝突したので、大抵すぐに別の釜での炊事になりました。避難先の地方都市で再び罹災する人も、珍しくはありませんでした。

商業地の焼け跡では、焼トタンを主な材料として、コンクリ造りの建物の残骸を利用した仮寝の城を作る人もいました。棒丸太を使った掘つ立ての焼トタン小屋は、この次の段階へと進んだものでした。避難所となった国民学校でそのまま日を重ねている人たちは、逐次減少していきました。

【避難所の滞在者】

空襲から3日が過ぎた5月28日昼の時点で、避難先となった8施設に罹災者の6割にあたる約21,300人が残っていました。（氷川小約6,000、乃木小約5,000、青年会館約3,000、青山小約2,000、青南小約2,000、山脇高女約1,500、日大三中約1,100、霊南坂教会約700）

【赤坂国民学校焼亡の手記について】

紙面の都合上、文頭124字、中略1は240字、中略2は651字割愛し、文末は原文400字分の要約とさせていただきます。原文では、文頭の略は「警戒」、中略1は「消火活動2回」、中略2は「逃避行」についての記事でした。

うわさで伝わった本当の戦況

インターネットや携帯電話が普及した便利な現代とは大きく異なり、戦前・戦時中は、一般の人にとって情報収集ややりとりがとても難しい時代でした。

戦時中の限られた情報源

人々が生活していくためには、色々な情報が必要です。しかし戦時中となると、情報源は限られました。当時の人々は、錯綜する情報や噂話までを頼りにしながら、みな必死で情報収集に努めていました。

テレビやインターネットなど、もちろん無い時代。主な情報源は、新聞やラジオ、回覧板、そして噂話でした。理系の大学生の中には、鉱石ラジオを組み立てて情報を手する人もいたとか。また、ミルクホールに行けば必ず新聞が置いてあったそうです。

戦時中にラジオや新聞、回覧板で得られる情報は、「日本の連戦連勝」という、情報操作を受けたものばかりでした。しかし、次第にこうした大本営発表とは裏腹に、日本軍の酷い負け方が噂されるようになりました。仕事でアメリカ大使館と付き合っていたTさんの父は、いち早くこうした情報入手しており、開戦時から「日本は負け

る」と家族で話していたそうです。爆弾が落ちた時には、消防団の人が被害状況を見に行き、みなに知らせてくれました。避難先で「どこに爆弾が落ちた」などの噂を聞いたり、町会の人知らせて回ってくれたことも。世界中の情報が行き交う平和な現代からは、想像もできないような状況でした。

戦後に普及した電話

戦後になると、次第に電話が普及し始めました。しかし、すべての家庭にすぐに設置されたわけではありません。いち早く電話を引いた家庭でも、めったなことがないと電話は使わなかったそうです。電話のある家庭には、電話を持ていない人がよく借りに来たとか。彼氏と長電話を始める女性も多かったそうで、タイマーを付けて管



当時の家庭電話

に来たとか。彼氏と長電話を始める女性も多かったそうで、タイマーを付けて管



当時のラジオ



当時の公衆電話

理した家庭もあったそうです。

電話を持ていない家庭に必要とされたのが、公衆電話です。青山斎場のそばの電話をよく使ったとはFさんの談。またGさんは、急用の時は電報を打ち、遠くの親戚に連絡する時に公衆電話を使ったそうです。

戦時下・戦後の暮らし

苦しさを超えた先に新しい時代が

乏しい配給物資しか手に入らなかった戦時中。戦況が悪化するにつれ、避けようのない徴兵や空襲によって、赤坂・青山から多くの命が失われました。やがて終戦が訪れると、街は少しずつ蘇っていったのです

家屋の引き倒しに重宝な男

空襲で落ちてくる焼夷弾は、道を隔てた先まで燃え広がります。こうした延焼を防ぐために、強制疎開という手段が取られました。街に軍隊がトラックで乗り付け、家々に縄を掛けて、片っ端から引き倒すのです。その運命を免れなかったEさんの家では、母や妹が地方へと移らざるを得なくなりました。

「強制疎開による防火帯づくりには、銃後の主婦らも動員されました。1週間後までに家を壊せという命令を受け、荷車で家を引っ張ったりして右往左往していたのです。そこで理科系学生の兵役免除の恩典に浴していたK大工学部の私に、取り壊しを手伝ってくれと声がかかりました。これに応じた結果、壊し方の専門家みたいな存在になりましたね」と、Eさんは当時を語ります。

家をただ倒すだけでは駄目でした。無理

に引っ張つてドスンと倒しても、今度は屋根瓦の片付けが難しくなるからです。そこでEさんは、家をまず横倒しにして、それから崩れた瓦礫を整理する方法を編み出しました。

しかし、豪邸の引き倒しはそう簡単にはいきません。巨大な柱を引っ張つても、切断しても、びくともしないのです。「力道山との勝負で有名な木村政彦八段所属の柔道場の引き倒しも、それは大変でした。特に道場の薩摩畳はつかまえない縁無しで、いやもう重いなんの。」この畳を防空壕の屋根にしようと考えたEさんでしたが、ようやく2枚せしめただけだったとか。

神宮外苑と学徒出陣

「土砂降りの雨の中、各大学の学生さんたちは鉄砲を肩にかつぎ、そろって腿を高く上げ、見事な行進をしました」とKさん。

昭和18年(1943)10月21日、明治神宮外

苑の国立競技場「地図A5上」に集合した、2万5千人の学徒。それを見送る旧制高校生、女学生らは、およそ5万人。この年に26歳まで徴兵を延期されていた20歳以上の文科系学生たちの兵役免除がなくなったため、彼らは戦地へと駆り出されることになったのです。

「ズボンの裾を押さえるゲートル巻きもうまく出来なかった虚弱体質の兄は、学徒動員を免れたひとり。人生を左右したひとコマでした」と、当時を回想するMさん。国立競技場での大々的な出陣学徒壮行会を企画した軍部の狙いは、戦う決意を若者たちに促すことにありました。この日、東條英機※1首相が読み上げた送別の言葉も、その考えに添ったものだったのです。

見送った、また見送られた多くの人々が、この日のことを今も語り継いでいます。「生きて帰ってきてほしい」「生きて帰れるものなら帰りたい」という願いは、好戦派を除いたすべての人に共通していたに違いありません。事実、「軍隊が嫌だったから、大学に入ったのに」

※1 東條英機 明治17年(1884)～昭和23年(1948)。陸軍大将。大臣職を歴任し、戦時中には内閣総理大臣を務めました。戦後の東京裁判で死刑判決を受けました。



いよいよ軍隊に入る時が来た。学友が揃って東京駅まで送りにきてくれて、とても嬉しかった。家の者には送らせなかったのだが、こっそり見ていたようだ。

「首相の訓示は忠君愛国を強制する話で、またかとうんざりした」「敵とは言え人間、それを殺しに行く運命を呪わずにはいられなかった」といった厭戦的な証言が、圧倒的に多く残っているのです。

学徒たちが国立競技場の門を出る時、思いがけない出来事が起きました。慎みを放り出した女学生たちが殺到して、別れを惜しんだのです。若い命を散らした、数千人にもおよぶ出陣学徒たち。サッカー観戦で雄叫びを上げる現代の若者たち。明治神宮外苑は、そうした歴史の明暗を黙々と見つめ続けているのです。



当時の家族の食卓風景／取材提供写真

10日のことです。『日本は戦争に負けた。ポツダム宣言を受け入れる』そんな内容を印刷したビラを拾ったので警察に届いたら、『これと言いつらしてはいけないよ』と口止めされました」とKさん。15日に昭和天皇が終戦を告げる玉音放送が流れた時、ようやく国民は敗戦の事実を知ったのです。

終戦直後の日々を生き抜くため、食糧や雨露をしのぐ住居を手する困難は、筆舌に尽くしがたいものでした。戦時中にはともかくも存在していた、人々の助け合いの心は消え失せました。誰もが他人を押しつけ、物欲に目の色を変えなければならなかったのです。「確かにとげとげしい世相でした。でも戦後の食糧難との戦いには、空襲の不安が無い。腹は減っても、親子や兄弟姉妹と一緒に暮らせる幸せに勝るものではありません」と、Sさんは語ります。統制を受けていた戦時中に比べ、タガが外れた敗戦後の経済は、乱れに乱れました。皮を一枚ずつはいでいくように、手持ちの衣類と交換で食糧を手に入れたら食いつなく「竹の子生活」という流行語が、この頃生まれました。

お屋敷の暮らしぶり

近衛師団は、良い家柄や多額納税者、社会的功績のあった人物らの子弟を、全国から集めて編成された部隊でした。そこでその頂

兵隊さんのおかげです

かつての青山通りでは、兵隊が列を組んで代々木練兵場へ向かう姿が見られました。軍馬に加え、この通りには野菜を積んだ牛の荷車が押し寄せ、粉塵が舞い上がったので、風の強い日には粉塵ならぬ、これら牛馬の糞塵が舞い上がったのです。

臭い話はこれに止まりません。赤坂の料亭街から出る肥やしは、栄養価が高いと評判でした。そこで世田谷周辺の農家は、早朝空の肥桶を牛車に載せ赤坂へやってきて、野菜を売りさばいた後に人糞をもらって帰ったとか。青山通りに通じる旧赤坂小前の旧道の坂は路面が悪く、車をひく牛が苦しんだことから牛鳴坂「地図B2上」と呼ばれました。

軍の中樞を擁した赤坂・青山では、場所柄から将官や高級将校らの馬上豊かな姿がよく見られましたが、大量に放出される馬の小便の活用先はなかったと、ここに永く住む古老は苦笑します。また、「ひどすぎる軍事訓練に落伍して苦しむ下級兵士が、青山通りで殴られるのを見て、兵隊には絶対にならないぞと、子ども心に誓ったものです」ともつぶやきました。

一方で、陸・海を問わず軍隊が在った軍都が、多かれ少なかれ経済面での恩恵を受けていたことも事実です。旧日本陸軍の二個師

点となる師団長は、当時「偉いさん中の偉いさん」とまで評される存在だったのです。

Kさんの母方の祖父は、大正時代にその近衛師団長を務めた人物でした。「歴代には皇族も名を連ねた、大変に名誉ある地位なのよ」と、母から繰り返し聞かされたといいます。青山に2千坪（約6600㎡）の規模を持つっていた祖父の屋敷には、使用人が30人前後もいました。

「英語をはじめとした多くの習い事に没頭して、家事の一切を使用人任せだった母は、結婚して原宿に所帯を構え、私を出産しました」そんなKさんの少女時代の仲間は、山本五十六※4、河辺虎四郎※5といった日本軍の将官や、外交官、大企業トップらの子女たちでした。子どもたちはそれぞれの家に上がり込んで遊びましたが、山本家だけは家風が厳格だったためか、上げてもらえなかったとか。

「ある日青山小から選抜された児童数人が、学校近くの病院の正門を描いていたら、『上手だね、完成したらうちにくれる?』と院長の斎藤茂吉※6先生がおっしゃいました。『いいえ、学校に提出するので、差し上げられませんか』というやりとりをしたのです」この話を聞いて、短歌を学び茂吉を尊敬していた兄が悔しがった言葉まで、Kさんは今も覚えているそうです。



隊の指揮者が機関銃をかついで走るというめったに見られぬ光景だ。小銃より重いので、交代でかついで行く。急行軍といって全速力で10キロを1時間で走る（10キロ行軍とも言った）。かなりきつい行軍だった。



全員営庭集がかかった8月15日。ボロなラジオから大元帥陛下（昭和天皇のこと）のお言葉が聞こえる。雑音もあって何を言っているのか解らなかったが、将校達には解っていたらしい。ついに戦争に負けた。すぐには信じられなかった。

団は、1〜2万人前後の戦闘員と、5000人前後の非戦闘員で構成されていたと考えられています。これだけの兵隊たちやその家族が利用するのですから、出入り業者や街の商店、飲食業界、旅館にとってみれば、商売がうまくいくのは正直なところ「兵隊さんのおかげです」。

配給制と竹の子生活

真珠湾攻撃が日米開戦の火ぶたを切った翌年には、それまでの米などに加え、味噌、醤油、塩が配給制※2となり、衣料は点数切符制※3になりました。薪やロウソク、マッチまで不足する窮状が相次ぐなか、さらに打ち出されたのが飼犬の供出命令。なんと、毛皮は飛行服に、肉は食用にされたのです。

「忘れもしません、昭和20年（1945）8月

戦前から物によっては戦後まで、物資の流通が国によって規制・統括されていたこと。人々は国から配布される通帳や切符との交換と金銭で、米、酒、タバコなど多くの生活必需品を購入しました。一人につき決められたわずかな分量しか、物資を手に入れることが出来ませんでした。

終戦まで衣服の購入にも金銭の他に、国が配布する切手との交換が必要でした。欲しい服の種類によって、それぞれ点数が決まっていました。



入営時の記念撮影／取材提供写真

ユア・マイ・サンシャイン

「軍隊帰りの若い男性教師が、戦災で荒れ果てた青山小の校舎の、どうにか使える教室でギターを奏でながら歌ってくれた『バツェンボー（Buttons and Bows）』や、子ども会で教わった『ユア・マイ・サンシャイン』などのアメリカン・ポップスは、暗い世相をいつべんにはじき返すかのような、新鮮で強烈な響きでした」と語るNさん。

- ※4 山本五十六 明治17年(1884)～昭和18年(1943)。元帥海軍大将。真珠湾攻撃やミッドウェー海戦を指揮しました。
- ※5 河辺虎四郎 明治23年(1890)～昭和35年(1960)。陸軍中将。終戦時には参謀次長を務めた、旧日本陸軍の中心人物の一人でした。
- ※6 斎藤茂吉 明治15年(1882)～昭和28年(1953)。アララギ派の歌人、精神科医。代表作に『赤光』など。

忘れられないもうひとつの出来事は、戦後間もなくの話です。母が仕立ててくれた姉とおそろいの服を着て、共にバイオリンを抱え、レッスンに急ぐ道すがら、キキッとジープが身近に停車。「瞬身構えたふたりに、降りてきた外国軍人が、彼女らに向けてカメラを構えたことでした。戦禍の癒えない敗戦国の子女が、そんな雰囲気をもっとも感じさせない風俗であつたのに驚いたのでしようよ、と笑います。

60年間南青山に住み続けたこのNさんは、「小学生時分は性別の分け隔てなどどこ吹く風で、ジャングル遊びや焼け残りの危険な鉄柱に登ったりした、やんちゃな女の子」だったそうです。

おまえは兵隊に向いている

あと数年で100歳というYさん。幼少の頃両親と死別し、赤坂で理髪店を営む叔父に引き取られ修業を重ね、その後を継ぎました。来る日も来る日も髪の毛を切る人生でしたが、ある時ついに理髪師の白衣をカーキ色の軍服に着替えて、中国に出征する日が来ました。「親も子もないおまえは、一番兵隊に向いている」と上官に言われたのに、こうして今も散髪に精を出しているのだと語ります。

赤坂の町は、空襲で焼け野原になってしまいました。戦後すぐに歩兵第一連隊（現東京ミッドタウン・檜町公園）は進駐軍のキャンプとなり、カマボコハウスと呼ばれた仮設住宅がたくさん建てられました。やがてある日、このカマボコハウスをとり壊すので、順番で中に入つて木材やドア、窓などをはずして持ち帰れることになりました。赤坂の人々はノコギリやナタを持参して朝早くから駆けつけ、これらを自分の家を作るバラックの材料として手に入れました。Kさんもこの時現地へ行きましたが、女手では一個しか運べなかったそうです。

赤坂区沼津戦災児学園

敗戦から4ヶ月経った昭和20年12月、静岡県沼津市に赤坂区沼津戦災児学園が発足しました。最盛期には3年生から6年生が在籍したこの学園は、昭和22年（1947）3月まで続きました。疎開学童の希望者を募つて、もう一度学園生活をさせ、中学入学まで面倒を見たこの戦災児学園は、全国でも珍しい取り組みだったのではないのでしょうか。

「私のような、空襲で家を焼かれ暮らす



昭和22年2月の結婚式当日の風景／取材提供写真

場所を失つた子どもたちを一時預かるうという考えが、この学園ができたきっかけみたいですよ」とは、出身者の談です。

別の人からはこんな話も。「戦後の食料事情は、どこも大変だったと思います。学園でも赤坂区から出る手当だけじゃとても足りないのです、自活まではいかないけれど、子どもらも海水を運んで塩を作りました」こうして作られた塩は、学園の先生がお米に替えに行つてくれたそうです。

労働の必要がある一方で、子どもたちには自由な時間も与えられていました。日曜日には町に出て行つて映画を見たりしたという思い出話からは、戦後の開放的な雰囲気を感じられます。

取材メモから…

戦前の赤坂・青山に暮らした子どもたちが見た、ユニークなこぼれ話を集めました。



天皇陛下お忍び

戦後直後、赤坂の駐日アメリカ大使館に、昭和天皇がお忍びで来たのを見ました。陛下は黒い車で、護衛の警視庁の車を二台だけ付けてスーツと大使館に入り、マツカーサー元帥に会いに行きました。

ベーブ・ルースに会いました

青山には、大隈信常邸のような大きな屋敷が並んでいました。アメリカの球団の来日時に、ベーブ・ルースの一行が大隈邸に来たのです。私の家はその隣だったのですが、この時は普段は入れない大隈邸に、隣組のみなさんで見に行きました。広いお家と庭があつて、そこでベーブ・ルース一行がボールを投げたりしているのを見学しました。小学校の5、6年生の頃かしら。

東宮御所のクジャク

東宮御所では、当時の皇太子がクジャクを庭で放し飼いにしていたらしいのです。朝になると、元赤坂の方までこのクジャクが飛んで来ました。時には羽を広げて、通りの真ん中でデモンストレーションをするように、歩き回るのでした。見事なものでした。御所のクジャクだと思つと、余計に美しさを感じたものでした。

みなさま、おかけ遊ばせ

「青南小で学んだ頃の傑作な話でね、『学習院に行つてきますから、おとなしく自習しといてね』と出掛けた先生が、帰校したら『みなさま、おかけ遊ばせ』といったふうに、口調が大変化してたんですよ」と、Sさんは、今も思い出し笑いをします。

レディーファースト

クリスマスには、アメリカ大使館が門の前で遊んでいる女の子だけを招待して、美しく飾った部屋の中で、お菓子や飲み物をご馳走してくれました。「ボーイさんは駄目ね」と言われ、男の子は門の中に入れて貰えませんでした。アメリカはレディーファーストの国だから、女性に優先されたのでしょうか。



桜の名所だった赤坂見附 昭和初期
復刻版大東京写真案内（協力：博文館新社）

『赤坂・青山地区 区民情報』あの日あの頃

●人口推移

	昭和5年 10月1日	昭和10年 10月1日	昭和15年 10月1日	平成23年 10月1日
人口	60,234	58,700	55,704	30,794
男	31,956	30,050	25,884	14,074
女	28,278	28,650	29,820	16,720
世帯	10,861	10,797	11,465	17,578

赤坂区史、政府統計の総合窓口 HP



『開化三十六会席』赤坂八百勘 豊原国周（明治11年・1878）
港区立港郷土資料館所蔵

●出生数等 昭和11年末

世帯数	19,437
人口	76,191
出生数	1,449
人口100に対する出生（出生率）	1.9

東京市赤坂区勢要覧（昭和12年）

●児童数推移（小学校）

昭和34年9月

学校名	1年				2年				3年				4年				5年				6年				合 計			
	児童数				児童数				児童数				児童数				児童数				児童数				児童数			
	学級	男	女	計	学級	男	女	計	学級	男	女	計	学級	男	女	計	学級	男	女	計	学級	男	女	計	学級	男	女	計
旧赤坂	1	33	21	54	2	34	29	63	2	35	47	82	2	37	62	99	2	46	51	97	2	62	50	112	11	247	260	507
青 山	4	120	89	209	4	117	104	221	4	120	107	227	5	150	134	284	6	155	147	302	7	195	175	370	30	857	758	1,615
檜 町	2	52	47	99	2	43	53	96	2	56	65	121	3	94	8	102	3	79	72	151	4	76	106	182	16	400	423	823
青 南	3	86	78	164	4	115	92	207	4	118	98	216	5	158	120	278	5	155	134	289	6	196	141	337	27	828	660	1,488
氷 川	2	44	34	78	2	31	35	66	2	40	54	94	2	49	51	100	3	58	61	119	3	59	68	127	14	281	303	584

港区史（下巻）
（人）

平成23年9月

学校名	1年				2年				3年				4年				5年				6年				合 計			
	児童数				児童数				児童数				児童数				児童数				児童数				児童数			
	学級	男	女	計	学級	男	女	計	学級	男	女	計	学級	男	女	計	学級	男	女	計	学級	男	女	計	学級	男	女	計
赤 坂	2	42	23	65	2	34	37	71	2	35	28	63	2	25	34	59	2	34	31	65	2	26	25	51	12	196	178	374
青 山	1	11	12	23	1	15	9	24	1	11	10	21	1	12	9	21	1	11	7	18	1	15	12	27	6	75	59	134
青 南	3	49	39	88	3	42	41	83	3	53	38	91	3	49	50	99	3	54	33	87	3	57	44	101	18	304	245	549

港教育ネット 9月

●生徒数推移（中学校）

昭和34年9月

学校名	1年				2年				3年			
	児童数				児童数				児童数			
	学級	男	女	計	学級	男	女	計	学級	男	女	計
赤 坂	5	148	99	247	4	96	67	163	3	80	83	163
青 山	8	257	150	407	7	203	133	336	9	284	159	443

港区史（下巻）

●産業人口

	昭和5年10月1日
有業	29,705
農業	265
水産業	6
鉱業	32
工業	5,095
商業	8,234
交通業	1,486
公務、自由業	9,259
家事使用人	4,877
その他の有業者	451
無業	30,529

赤坂区史

●在留外国人数

国名	人口
中国	75
イギリス	25
ロシア	13
フランス	2
ドイツ	2
オーストリア	1
スウェーデン	8
アメリカ	56
オランダ	5
ポーランド	0
アルゼンチン	1
ハンガリー	1
フィンランド	1
ベルギー	1
タイ	1

東京市赤坂区勢要覧（昭和12年）

●婚姻及び離婚件数 昭和11年末

人口	76,191
婚姻件数	628
離婚件数	70
婚姻100に対する離婚	11.15

東京市赤坂区勢要覧（昭和12年）



赤坂区役所 昭和15年
赤坂区史蹟写真帖 港区立港郷土資料館所蔵

《あとがき》

3年間にわたり、赤坂・青山地区に暮らした多くの語り部の皆様から古い話を伺い、冊子にまとめたものをお届けすることができました。この間、取材に協力してくださったすべての方に心から御礼申し上げます。とりわけ、お話を聞かせていただいた方々には自宅にお邪魔したり、遠路足を運んでいただいたり、ひとかたならぬ迷惑をおかけしました。ここからお礼とお詫びを申し上げます。

赤坂・青山地区の変化は速く、10年前の姿すらまったく思い出すことができないほどです。そこで、戦前・戦後の混乱期を知る先輩たちには、その時代の話を今、聞いておかなければとの思いで始まった、この冊子の編集作業でした。

取材の過程で、汲んでも尽きない泉のように湧き出た皆さんの話の中から、この地域の歴史や今まで忘れていた言葉や風習、生活の息づかいなど、多くを学ばせていただきました。また、かつての赤坂・青山を生き生きと楽しそうに語られる姿に勇気づけられ、楽しく、豊かな時間を過ごすことができ、ますますこの地への愛着を深めることができました。それらの作業を通じた、人や仲間との充実した時間も楽しい思い出となりました。

この冊子は分科会のメンバーが分担してお話を聞き、執筆したものです。地域の歴史や生活を知る上での一助にしていただければ、メンバー一同無上の幸せに思います。ご協力ありがとうございました。

平成24年3月 まちの歴史伝承分科会メンバー同

《協力者一覧 敬称略／五十音順》

青木厚子	鈴木英三
赤壁和子	鈴木克明
浅野里子	園部達郎
飯島満智子	高木愛子
伊倉栄一	滝澤義三郎
石川欽司	竹内菊代
石渡光一	竹下昌介
泉宏	寺田松雄
儀野誠一	遠山秀子
儀野衛孝	土光陽一郎
伊藤進	戸田治子
稲田四郎	永井正子
岩井秀雄	西尾博夫・悦子
碓井澄枝	西家忠雄
恵川義昭	馬場長夫
大橋喜元	林信子
大脇輝子	平田耕吉
岡本もも子	平田幸子
岡山清	平林とみ子
小川幸一	藤田孝子
尾崎守夫	藤原新一郎
釜井美代	細田の代
川島信録	堀尚子
河辺初恵	牧野嘉津子
木内信夫	松浦道子
木内幸夫	水谷友子
木内良夫	宮下正美・淳子
木村良夫	村澤泉
小出千代子	八木達也
古河原昭二	山崎純男
小林章子	山田千代樹
小林栄	横田善之
小林敬三	横山耀子
佐伯修	吉川直吉
佐藤和子	吉澤清吉
澤村祥三郎	吉武静子
塩田津子	吉野太郎
品川清	米林豊
柴田きよ子	渡辺亮
杉山晏	

《参考文献》

赤坂小学校の120年「赤坂小学校同窓会・南会
開校・開園九十周年記念誌（檜町小学校、中之町幼稚園
木村行親先生を偲ぶ（氷川尋常小学校卒業生有志同）
氷川小学校今、その歴史を閉じる時に（氷川会）
赤坂そして氷川（氷川国民学校初等科昭和18年修了生有志
百周年記念誌「青山小学校・青葉幼稚園」
七十周年記念誌「青南小学校」
歿歴「青南33会」
古稀燦譚「青南燦譚」
疎開学園物語「積惟勝・帝都出版」
東京都立沼津戦時疎開学園要覧「積惟勝・都立沼津戦時疎開学園
我等は海と松風と育ち（赤坂沼津学園同窓会）
赤坂小史（山證券）
赤坂の空襲の夜、そしてその後「茜坂二三会」
赤坂物語（川端淑子・都市出版）
いくたびの春秋 平田幸子・葉摘書
おもいで記「村沢紀郎」
第10回紅緑会公演パンフレット「全国芸能文化財通覧」
東京豊川沿革誌「豊川福岡東京別院」
私の赤坂！ⅡⅢ「津村忠彦・津村書房」
青山近辺のお店の移り変り「園部達郎」
表参道が燃えた日「表参道が燃えた日編集委員会」
写真で見る東京・青山の記憶「青山を研究する会」
東京青山1940「田口道子・岳陽舎」
昔の町会近辺「児玉昭太郎・南青山六七町会」
明治神宮外苑創建八十年記念写真集「明治神宮奉賛会」
創立50周年記念誌「赤坂青山町会連合会」
復刻版大東京写真案内「博文館新社」
国勢調査 赤坂区（昭和10年）「東京市臨時国勢調査部」
東京市赤坂区勢要覧（昭和12年）「東京市赤坂区」
赤坂区詳細図（昭和12・16年）「日本統計地図」
火災保険特殊地図（都市整図社）
大日本職業別詳細図（昭和11年）「東京交通社」
赤坂区史（赤坂区）
港区区史（下巻）
新修港区区史「港区」
聞き書き みなと女性史「港区・みなと女性史をつくる会」
戦乱と港区「港区」
増補 写された港区四（赤坂地区編）「港区」
増補 非国書目録「港区」
増補 港区近代沿革図集 赤坂・青山「港区」
平和への願いを込めて「港区」
平和への願いを込めて「二〇〇七」
まち探訪ガイドブック「港区」
私と町の物語上巻「港区」
政府統計の総合窓口ホームページ

語り継ぐ赤坂・青山 あの日あの頃

平成24年（2012年）3月発行

編集 港区赤坂・青山地区タウンミーティング まちの歴史伝承分科会

発行 港区赤坂地区総合支所協働推進課

東京都港区赤坂4-18-13 電話03-5413-7013

刊行物発行番号23235-2035